

---

# 鬼、来たれ！

サイトウ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

鬼、来たれ！

### 【Nコード】

N4130BA

### 【作者名】

サイトウ

### 【あらすじ】

石動圭は術士の家系に生まれたが、兄が行方不明となり、両親の死により、一般人として平凡な日々を過ごしていた。ある日、圭は公園でクラス委員長の佐藤美咲を正体不明の大男から助け……

## 序章 『人間狩り』

狩りは迅速に行わなければならない。

狩場の状態と獲物の行動パターンを見極めることも、ある程度の冷静さを保つことも重要だ。

けれど、何を心掛けているか？ と問われれば、彼はそう答える。次に重要なのは手加減だ。

最初は戸惑うばかりで、捕獲の仕方さえ分からずに早死にさせてしまった。

ようやくコツを掴んだのは獲物が十を越えてからだ。

捕獲したばかりの獲物は泣き喚く。

やがて、自分の運命を受け容れて静かになる。

心の芯まで絶望に染まったと言うべきなのかも知れない。

けれど、絶望した獲物は長く保たない。

動かなくなれば使えそうなパーツを抜き取り、残りは捨てる。

この半年は順調と呼ぶに相応しい時間だった。

そう、邪魔者が現れるまでは。

そいつは優れた狩人だった。

何度も、何度も追い詰められたが、幸運だったのはそいつにも邪魔者がいたことだ。

それも一人や二人じゃない。少なくとも二十人以上。

そいつは何度も邪魔者を蹴散らし、幾度かの戦いの末に動くのを止めた。

邪魔者と戦いながら自分を始末できないと悟ったからだ。

危うい均衡を保つ二つの勢力……その間を泳ぎながら今日も狩りを行わなければならない。

天秤が一方に傾けば、どちらかの勢力に殺されてしまうだろう。

だから、今まで以上に真剣になるし、今まで以上に獲物を得た喜びが大きい。

楽しいのだ。

これほど充実した時間は今までの人生で一度もなかった。

こんなにも真剣に生きようとしたことはなかった。

何かを忘れていたような気がしたけれど、忘れてしまっくらいなら大したことじゃないだろう。

ゆっくりと巣穴から這い出し、月を眺める。

生きるために、人間狩りを始めよう。

## 序章 『人間狩り』（後書き）

精霊騎士ヴェルナ同様、某社に送って、一次選考落ちした小説です

Orz

掛け合いに重点を置いたライトな小説を目標にしていたのですが…。

## 第一章 『日常の終わり』

その日、石動圭は自転車を押しながら坂を上っていた。アパートを出てから三十分も経っていないのに汗だくだ。

夏の自転車通学は地獄だ。

肌を焼く日差し、高い湿度、古い自転車が体力を消耗させる。

黄色の通学帽が数メートル先で揺れている。

集団登校する小学生だ。

元気に走り回る姿は活力に溢れている。

俺は無理だ、走り回る気力がない。

ギア付きの自転車に乗り換えたいが、残念ながら懐具合に余裕がない。

石動圭は一般的な高校生よりも貧乏なのである。

十年前に兄がアメリカで行方不明になり、二年前に両親も仕事上の事故で死んだ。

資産家であった両親は相当額の遺産を残していたのだが、後見人を名乗る親戚に奪われてしまい、圭の手元に残ったのは数冊の古文書と父親の手帳だけだ。

古文書は換金方法が分からないし、父親の手帳は生前の交友関係が書かれているだけで金になりそうにない。

ほぼ無一文だった圭が郊外のアパートで一人暮らしができてるのは兄の婚約者のお陰だった。

彼女が援助を申し出てくれなければ、養護施設の世話になっていただろう。

はあ、と圭は坂を見上げて溜息を吐いた。

「……坂が多すぎる」

坂の傾斜は緩やかなのに距離があるし、この街……大川市は平坦な道が少ない。

埼玉県大川市は東京まで私鉄で一時間弱、外秩父山地の外縁に位

置する今一つパツとしない街だ。

武蔵の小京都と呼ばれているらしいが、共通点は盆地特有のねっとりとした夏の暑さくらい。

古くから伝統工芸が盛んで、第二次世界大戦中は名産品の和紙を材料とした風船爆弾の工場があつたらしい。

要するに大川市は何処にでもあるような田舎町なのだが、学校の教師に言わせると昭和の雰囲気を残した街となる。

昭和と言つ単語は誉め言葉じゃないような気もするのだが、大川市には古い家が多く残っている。

坂の上にある武家屋敷風の家もその一つだ。

「モーニン！」「」「」

「おはようございます」

小学生達が元気よく挨拶するとエプロンドレス姿のメイドは掃除の手を休め、流暢な日本語で答えた。

セシル・ローランド……それが彼女の名前だった。

身長は日本人男性の平均身長を上回るくらい。

ボデーラインはスマートで、ビスクドールのように整った顔立ちが冷淡そのものだ。

彼女の人形じみた印象を際立たせているのが、肩の辺りで切り揃えられた白髪だ。

十年前、彼女は事故にあつた。

ニユース番組のトップを飾るような大事故で、彼女は数少ない生存者の一人だった。

生き残ったことが奇跡なら、後遺症一つ残さずに回復したのも奇跡。

だが、その代償のように彼女は記憶と髪の色を失った。

身元を証明する物は何一つなく、莫大な治療費まで支払う羽目になった彼女に手を差し伸べたのが、シャノン・ローランド……彼女の旦那様である。

雇用関係における旦那様ではなく、結婚制度における旦那様！

英語だとハズバンド！

ちよつと控え目なオツパイが！

手を伸ばせば届きそうなオツパイが！

メイドさんのオツパイは既にシャノンさんのものなのである！

だがしかし、人妻である事実が新たな魅力を与えているのも事実なのだ！

セシルさんのオツパイはメイドの従順さと人妻の淫靡さを兼ね備えているのだ！

「おはようございます、圭様」

「オツパ、おはようございます」

ゲフン、と圭は咳払い。

「あゝ、クリスは起きてますか？」

「……朝食の際は起きていたのですが」

「分かりました」

「毎朝、申し訳ありません」

「大事なクラスメイトなんで」

嘘じゃないぞ、と圭は時代劇にでも出て来そうな門を潜った。

ローランド邸は広い。

倉とガレージまであるのに土地が余るほどだ。

庭は日本庭園風……二年前は植木が複雑な陰影を生み出していたのだが、今はこざっぱりしている。

枝ガ伸び放題ダヨ、と言ってシャノンさんが枝を切り落としたらしい。

「シロとハイイロ、おはようさん」

ガウ！ と狒犬のように玄関に座っていた二匹の超大型犬が吠える。

名前の由来は毛が白いからシロで、灰色だからハイイロだ。

犬っぽいのは名前だけで二匹とも妙に立派な体格で凜々しい面構えをしている。

ぶつちやけ、狼に見える。



怖いことになりそうなので考えるのを止め、圭は屋敷に上がった。屋敷の間取りはTに近い。

短い線が玄関、土間、居間、台所、風呂、長い線は襖で区切られた八つの部屋だ。

圭は居間に入り、座椅子に座る少女を見つめた。

眠っているのか、頭が不規則に揺れている。

名前はクリス。

腰まである長い金髪をツインテールにしている。

本人は触覚つぼくしたかったらしいのだが、髪質のせいで力なく垂れている。

多分、ウサギの耳が自重に負けて倒れたらこんな感じ。

セシルさんの形質が遺伝しているらしく、無防備な寝顔は天使のように愛らしい。

「おい、クリス」

肩を揺すってもクリスは唸るだけだ。

「……それにしても」

圭は深々と溜息を吐いた。

クリスは外国人に対するイメージを真っ向から否定するような未発達ボディーだ。

とにかく華奢で目を凝らして、ようやくオツパイらしき膨らみが確認できるくらい。

今も残念なことになっているが、将来も残念さが継続しそうなオツパイなのだ。

何故、オツパイのサイズを遺伝させなかった！ と遺伝子に説教してやりたくなる。

そんなことを考えているとクリスが恨めしそうな目で圭を見上げていた。

「何故、ワシの胸を見るたびに残念そうな顔をする」

「そんな顔してねーよ」

「まあ、良い」

クリスは億劫そうに立ち上がり、

「ワシの荷物を持たせてやるう」

「お前は何処の貴族様だ」

言い返しながら、圭は床に放置された鞆を手に取った。

二人一緒にシロとハイイロ、箒で地面を掃くセシルさんに挨拶。

我が物顔で荷台に座るクリスに苦笑、圭は自転車を漕ぎ始めた。

「仕事ごとごと、見ている内にい、働く人になりたくくない！

なりたくない、なれないよ！ コネもスキルも足りないな！ 回るな、

地球！ 働く人になりたくくない！」

「朝っぱらからネガティブソングを歌うな！ 何だ、それは！」

「その昔、NHKで放送されていた『はたらくひとたち』の替え歌  
じゃ。ワシの働きたくないと言う気持ちを込めてみた！」

「どれだけ働きたくないんだ、お前は！」

「無論、死ぬまでじゃ」

「徹底してやがるな、おい」

「一生遊んで暮らせる財産があるのに父上は仕事を辞める気配がな  
いし、母上は勉強しろとうるさいのだ。おまけに妹のカルは勉強つ  
て楽しいよね、と目を輝かせる始末」

「何が不満なんだよ？」

「ワシの怠惰さが際立って困るのだ。世界中の人間がワシと同じく  
らい怠け者であれば良いのに」

「のび太君みたいなことを言ってるじゃねーよ」

「だが、世界中がワシと同レベルであれば戦争がなくなるじゃろ？」

「……お前は凄いな」

「そうじゃろ」

誉めたつもりはないのだが、クリスは満足そうに頷いた。

ジヨギングしている爺婆に怒鳴られたくないので藤山公園を大き

く迂回。

ブレーキを掛けながら坂を下っていると可愛らしくしゃみが聞こえた。

「クリス？」

「フリスクを噛むとくしゃみが出るのはワシだけかの？」

「俺は出ねーよ」

「ふむ、ワシだけかも知れんな」

益体もない話をしながら坂を下る。

長い坂を下れば、圭とクリスが通う大川高校は目と鼻の先だ。

県立大川高校は私鉄大川駅の裏手にある男女共学の普通科高校だ。校舎は教室棟と特別教室棟に別れている。

体育館、格技場、図書館と部室棟はあるが、プールはない。

のんびりとした校風が災いして進学率は低め、部活動も活発な方じゃない。

のんびり歩く生徒達を追い抜き、校舎裏の自転車置き場に自転車を止める。

いつも校舎裏はジメジメしていて、地面を踏んだだけで水が染み出してくる。

人通りが激しい場所はグチャグチャ、それ以外の場所は分厚い苔に覆われている。

靴を汚したくないからと苔の上を歩くと高確率で苔が剥がれて転ぶ。

一度でも転べば普通のヤツは警戒するようになるのだが、二度も三度も無警戒に歩いて転ぶクリスみたいなアホもいる。

と言うか、二度も三度も転ぶようなアホはクリスだけだ。

「今日もご苦労、ケイ」

「偉そうにしないで足下に気をつける」

「二度も、三度も、天才であるワシが転ぶ……ッ！」

転びそうになったクリスを圭は抱き留めた。

「お前が何度もスツ転ぶせいで俺の反射神経は超能力レベルだ」

「このワシが転ぶはずがなかるう！　これは……そうじゃ、これは甲斐甲斐しく送り迎えする下僕に対する御褒美じゃ！　どうじゃ、世界一の美少女を抱き締めた感想は？」

「筋っぽくて今一つ」

「ワシは特売の肉か！　大体、ケイはワシの何処に不満があるんじや？　ワシは大卒のインテリで、差別主義者でもない！　おまけに家は資産家で、ワシ自身もハイテクパテントで金持ちじゃ！　学歴、性格、金と三拍子揃ったパーフェクト美少女じゃぞ！」

「胸」

「貴様は胸にしか興味がないのか！」

「ない」

ムキイツ！　とクリスは両腕を振り上げた。

面倒臭いので圭はクリスを担ぎ上げ、玄関で下ろす。

「ふむ、ワシの靴が汚れないように配慮したのだな」

「まあ、そんな感じ」

「偉いぞ、下僕！」

バシッ！　とクリスが圭の尻を叩く。

いつから俺は下僕になったんだろうと思わないでもない。

去年の四月にクリスに声を掛けたのが腐れ縁の始まりだ。

その時の刺々しい態度がツボに嵌り、話しかけている内に下僕扱いだ。

そんなことを考えつつ、自分の教室……二年A組に移動する。

予鈴まで十分くらい、圭は窓際の最後尾に座った。

視線を傾けるとクリスがメガネを掛けた女生徒と何かを話していた。

メガネを掛けた女生徒は綾峰優花。

いつも自信なさそうに目を伏せ、話す時は声のトーンを抑え気味。髪型はボブカット風で、何処のクラスにも一人はいる地味なタイプだ。

だが、学校一の美乳の持ち主である！

歩く時は美乳を隠すように猫背気味！

ちよつとでも視線が胸に集中しようものなら、頬を染めちゃうよ  
うなヤツである！

ふと目が合い、優花が慌てて目を背ける。

「朝っぱらからガン飛ばしてんじやないの」

「見てただけだろ」

当たり前のように机に座る女生徒を圭は見上げた。

少女は両腕を組み、非難がましい目で圭を見下ろしていた。

彼女……佐藤美咲は空手部の次期主将でクラス委員を務める優等  
生だ。

髪は少年のようなベリーショート、顔立ちは整っている。

勉強も、スポーツも如才なくこなし、そこそこに人望も厚い。

何気にハイスペックなくせに派手さに欠ける。

オツパイも普通だ。

ここまで圭に何も感じさせないオツパイの持ち主は珍しい。

「不良のくせに」

どうも圭は一部の生徒から不良と認識されているらしく、彼らの  
急先鋒に立つ美咲は意味もなく突っ掛かってくる。

「ちよ、そんな怖い目で見て、やる気？」

どうすれば誤解を解けるのだろう、と圭が考えていると美咲は机  
から飛び降り、拳を構えた。

腰を落とした左前構えはそれなりに見事なものだった。

戦えると思いつ込んでいる時点で美咲は自分の実力を過大評価して  
いるのだが、指摘しても仕方がないので圭は両手を上げた。

「な、何よ、万歳三唱？」

「降参、空手部の主将とやり合うほど馬鹿じゃない」

美咲は安堵した様子で拳を下ろし、

「良い？ 私はアンタが不良だからって遠慮しない。クラスの和を  
乱すような行動を取ったら許さないんだから」

「へいへい」

英雄のように取り巻きに歓迎される美咲を横目に圭は深々と溜息を吐いた。

「毎朝毎朝、見事なツンデレっぷりじゃな」

「ツンデレ？」

「『勘違いしないでよね』と言いつつ、主人公にフォーリンラブなヒロインを差す言葉じゃ」

「ベジータか、鴨川会長みたいなもんか？」

「その何処がヒロインじゃ！」

クリスが圭の首筋に手刀を叩き込む。

頸動脈から外れているし、非力なクリスに殴られても痛くない。

「作中で『勘違いするなよ』って言うじゃん」

「お前は男をヒロインとして扱うのか！」

「最近はその言うのが流行っていると」

「流行ってないわい！ 少なくとも、お前が言ったキャラクターのカップリングはありえん！」

「……なるほど」

圭が相槌を打った時、チャイムが鳴った。

クリスの部屋で読んだ漫画によれば、言われるがままに勉強しているヤツは思考が停止しているらしい。

けれど、上を目指すのならレールに乗るのが手っ取り早いし、レールに乗るために勉強しているヤツは現実を見据えているんじゃないだろうか？ と圭は思う。

だから、圭は隣で安らかな寝息を立てるクリスを見無視して真面目に授業を受ける。

体育の後なので柑橘系の匂いが漂い、女生徒の下着が、下着がさ、ブラジャーのラインが透けて見えるのだが……無視だ、無視するベ  
きだ。

セシルさんのオツパイと同じように手が届きそうまで手が届かないオツパイなのだ。

だが、手が届きそうにないからと鑑賞すら諦めてしまうのは如何なものか？

高校を卒業したら教師になる以外、合法的に鑑賞する術がなくなるのだ。

「あ、あの……石動君、先生の授業って分かりにくいですか？」

「あ？」

ヒツ、と女性教師は小さく悲鳴を上げた。

「照り返しが少し強くて、先生の授業が分かりにくいとかじゃないんで」

「ごめんなさい、気が付かなくて……すぐにカーテンを閉めますから」

大学を卒業したばかりの女性教師は泣きそうな顔でカーテンを閉めた。

女性教師は場の空気を和ませようとしたらしくジョークを口にした。

乾いた笑いが教室に響く中、圭はノートを書き損じて舌打ち。

教室が気まずい雰囲気にもまれ、女性教師は授業が終わると同時に逃げるように教室から出て行った。

「ちよつと、石動い！」

「あ？」

鬼のような形相で向かってくる美咲に圭は気の抜けた返事をする。

「授業の邪魔ばっかしてんじゃないわよ！」

「してないだろ」

「授業中に余所見して、舌打ちまでするなんて授業を妨害しているようにしか見えないじゃない！」

ポリポリと頭を掻き、圭が立ち上がると美咲は拳を構えた。

言い争うのも馬鹿らしいので、圭は眠っているクリスの肩を叩いた。

「……おお、飯の時間じゃな？」

「ああ」

圭は短く応じ、クリスのナップサックを持つ。

重量があるのは二人分の弁当が入っているからだ。

「ケイ、屋上に行くぞ」

「おう」

あからさまに無視されたためか、美咲の肩が震えていたが、圭は黙ってクリスの後を追った。

大川高校の屋上は昼休み限定で生徒に開放されているのだが、圭は一度も他の生徒を見たことがなかった。

高級そうな重箱に詰められた凄く手の込んだ料理を食べ終え、圭はクリスを見つめた。

クリスは途中で合流した優花の美乳を枕に就寝中だ。

勉強しているように見えないが、クリスは成績が良い。

理数系はトップ、暗記科目はパーフェクトだ。

気遣われてんのかな、と圭は重箱をナップサックに戻した。

意外とクリスは気遣いのできるヤツなのだ。

セシルさんに二人分の弁当をお願いしてくれたり、夕食に誘ってくれたりする。

「……なあ」

「は、はい!!」

圭が声を掛けると優花は上擦った声で返事をした。

「俺は不良だと思われているんだらうか？」

え？ と愛想笑いを浮かべたまま優花が動きを止めた。

目が救いを求めるように忙しく動く。

「……そうか」

「あ、あの、そんなに気にすることないと思います」

「何でだろ？」

ええっ？ と優花は盛大に頬を引き攣らせた。

「それは、その」



「髪は染めてないし、授業は真面目に受けてるし、掃除もサボってない。真面目に将来のことも考えているんだけど、共通の話題がないせいかな？」

「どれだけ共通の話題が重要なのか、クリスと優花を見ているとよく分かる。」

共通の話題があるだけで異文化コミュニケーションが成立しているのだ。

「あの、その……私も含めて、みんなは石動君が怖いんだと思います。でも、理由が分からなくて、それで不良だから怖いんだって安心したがつてるんじゃないかな、って」

「昔の人が訳の分からない現象を妖怪のせいにしたようなものか？」

「多分、それに近いかも」

「その割にクリスは俺を怖がってないみたいだけど」

「クリスちゃんは物怖じしないって言うか、怖い物知らずって言うか……だから、その」

「だから、俺みたいなヤツに進んで関わると」

シヨックは受けなかった。

「やっぱり、と納得してしまっただくらいだ。」

圭は黙って空を見上げた。

六限、掃除、シヨートホームルームを終えるとクラスメイトが散っていく。

「クリス、放課後はどうする？」

「今日は直帰じゃ。新刊も発売されていないし」

クリスは漫画研究会に所属しているのだが、全く部活動に参加していない。

休んでもペナルティーを課せられないので幽霊部員＝帰宅部として半ば黙認されたような雰囲気になっている。

「ケイ、食事は？」  
「御相伴に預かりたい」  
「うむ、母上に頼んでおく」  
クリスはリュックから取り出したケータイを操作。二言、三言、セシルさんと会話を交わした後でケータイをリュックに戻した。  
「快く引き受けてくれたぞ」  
「ありがとな」  
「下僕の世話をするのは当然のことだ」  
圭は苦笑を返し、クリスの荷物を担いだ。

初めてクリスの部屋に誘われた時、圭の胸は甘酸っぱい予感に高鳴った。

ピンクの妄想が現実になるかも知れないと期待した。けれど、床に散らばるDVD-Rとエロゲーの箱はハードルが高すぎた。

今日も今日とてハードルを乗り越えられず、クリスの後ろ姿を眺める。

帰宅するなり、ちゃぶ台に置かれた自作パソコンでエロゲーを始めるクリスは変だ。

ディスプレイを見つめながら薄笑いを浮かべる姿は百年の恋も冷めかねない。

ディスプレイの中で首輪をした女の子がバックからヤられていた。何故か、パラメーターっぽいのが表示されている。

「どんなゲームなんだ、それ」

「調教ゲームじゃ。この娘とエロエロな行為をしてパラメータを上げると、エンディングが分岐……そろそろエンディングじゃな」

クリスがキーを押すと凄いスピードで文字が流れた。

「ケイ、調教は愛がなければいかん。愛するが故に行為に及び、愛

するが故に嫌々ながらも行為を受け容れ、新たな自分を発見する…  
…そのプロセスが重要じゃ。刮目せよ！ 我が愛の形！」

スタッフロールが終わり…少女は薄暗い部屋にいた。艶のある拘束具に戒められた少女はフローリングの床に力なく横たわり、こちらを虚ろな瞳で見つめていた。少女が壊れたように童謡を歌い…  
…フェードアウト。

「い、いかん、自我崩壊エンディングじゃ」

「今までの自分すら見失ってるじゃねーか！」

「だ、だが、無茶っぽいコマンドでも表示されれば選びたくなくなるのが人情ではないか。嫌と言われても、何度も繰り返し返して愛を確かめようと…裸で公園に連れ出したのがマズかったかの？ それとも、ピアスか？」

「お前の愛は怖すぎる！」

「ケイもやるか？」

「やらねーよ」

「なかなか面白いぞ」

「面白くても女の子の部屋の部屋でエロゲーをプレイする気にはならねーな」

「まはパソコンから伸びるLANケーブルを摘み、

「ネットゲームをやれば良いじゃん」

「ワシは二年も日本にいるのにユーカ以外に友達と呼べる人間がおらん」

「だから？」

「リアルで友達を作れないワシがネットゲームで友達を作れる訳なかるっ」

「言い切り、クリスは別のエロゲーを始めた。

クリスは変だが、とても楽しそうだ。

「あゝ、ダメな人になりたいな」

「ワシがダメな人だと言いたいのか？」

「別に…DVD Rくらい片付けるよ。つーか、何が入ってんだ

よ

「動画サイトから落とした音楽ファイルが入っておる」

「犯罪じゃねーか！」

「ワシはアップロードなんてしておらんぞ」

「ダウンロード自体が違法だ！」

「罰則規定がないから問題ない」

「大ありだろ！」

「そうは言うが、プレイヤーをインストールしたら動画サイトからダウンロードできるようになってしまったのだぞ？ 責任はプレイヤーの制作者にあつて、私は望みもしない機能を押しつけられた被害者だ」

「盗つ人猛々しいな、おい！」

「古来より日本にはこのような諺がある……盗人にも三分の理！」

「たかだか三分の理を振りかざして偉そうだ！」

「何なら財布を投げつけてくれても構わんぞ」

「財布ごと追銭を要求するのかよ！」

圭が叫んだ瞬間、スパン！ と襖が開いた。

廊下に立っていたのは小柄な……と言っても頭半分クリスよりも背が高い……少女だ。

ブレザーに包まれた肢体は引き締まり、猫科の肉食獣を彷彿とさせる。

髪は荒野の土のようなブラウン、肌は健康的な小麦色だ。

手入れをしていないので眉は太め、ボーイッシュな魅力を持った少女だ。

クリスの血の繋がらない妹でカル・ローランドである。

「ケイ兄ちゃん！」

パソコンを跳び越え、少女は布団に寝そべる圭にダイブする。

ドカン！ と内臓が破裂しそうな衝撃に圭は歯を食い縛って耐える。

「エへへ、今日も一緒に御飯を食べるんでしょ？」

「いつも申し訳ないとは思ってるんだけどさ」

「気にしなくても良いと思うよ。お父さんも、お母さんもケイ兄ちゃんのことを気に入っているみたいだし、ボクもケイ兄ちゃんが大好きだもん」

「お、おう」

口籠もってしまったのは疚しい気持ちを抱いているせいだろうか。だが、パンツが見えそうな状況で疚しい気持ちを抱くなど言う方が難しいのではないだろうか？

カルは将来に期待が持てそうなオツパイをしている。

偶然にもオツパイに触れてしまったことがあるのだが、内側に芯を残していた。

通説によれば芯が残っていると大きくなる可能性が高いらしい。いや、今も魅力的なのだ。

カルの少年のような体つきに軽い倒錯感を覚えるほどだ。

「ケイ兄ちゃん、痛かった？」

「脳内でオツパイ祭を開催しているのではないか？」

「オツパイ祭？」

「一見、ケイはクールに見えるが、オツパイしか見ていないオツパイマニアだ」

カルは今一つ分かっていないらしく首を傾げた。

「分からのなら良い。ほれほれ、いつまでもジツとしておらんと部屋で宿題でもするが良い」

「分からない所があったら教えてくれる？」

「いつでも聞きに來るが良いぞ」

「ケイ兄ちゃん、またね」

「縞パンか」

カルが襖を閉めた後で圭は小さく呟いた。

「何と言つか、ケイは病氣じゃな」

「男なら当然だろ」

「ケイの場合は度が過ぎておる。中学生のカルにまで欲情するくせ

に同級生のワシには何も感じんのか？」

「さっぱり」

「清々しいまでに言い切るの。やはり、胸のせいかな？」

パソコンに向かいながらクリスは左右から胸を押し上げようとする。

けれど、寄せて上げるだけの贅肉がクリスにはない。

「脱ぐと格好良いと自負しているのだが」

「俺も凄いで、腹筋が割れてるからな」

むううう、とクリスは不満そうに下唇を突き出し、圭の上に飛び乗った。

衝撃はカルの時より小さい。

「おゝ、ガツシリした体つきじゃ！」

「これでも鍛えてるからな」

調子に乗ってロデオマシンっぽく動いていると襖が開いた。

圭とクリスが反射的に視線をスライドさせると、セシルさんと目が合った。

突っ込んでくれれば気も楽なだけけど、セシルさんは無表情だ。

気まずい沈黙が舞い降りる。

「……お醤油が切れてしまったので買って頂ければ」

「ち、違うのだ、母上！ こ、これは疚しいことをしていたのではなく」

「そうです、違うんです！ こ、これはクリスが『ワシには何も感じないのか』って乗ってきて！ 脱ぐと格好良いとか！」

「清々しいまでに墓穴を掘っておるぞ、ケイ！ ブラジルまで突き抜けそうじゃ！」

「……醤油」

「はい」

圭とクリスは互いに目を逸らしながら立ち上がった。

クリスが細い肩を震わせながら出て行く。

「圭様、これを」

「あ、はい……っ！」

圭は千円札を受け取り、息を呑んだ。

二つに折り畳まれた千円札の間にゴム製品が挟まれていたからだ。

「え？ ええっ？」

「避妊はすべきではないかと」

「俺とクリスはそんな関係じゃ」

「そんな関係でないのなら尚更」

「あ、あの、セシルさん？」

「私は二人を信じておりますが、その気がなくとも若さ故に過ちを犯す可能性は否定できません。むしろ、若い二人は知的好奇心と性欲の赴くままに行動してしまうと考えるべきかと」

「それは信じてないんじゃない？」

「あくまで保険と考えて頂ければ。もともと、遊び半分で娘に手を出すようであれば」

「て、手を出すようであれば？」

スウツとセシルさんは目を細め、凍てついた指先で圭の首筋に触れた。

「……地獄に落ちます、この世界に生まれてきたことを後悔するほどの痛みと絶望を味わいながら」

ガクガクガクツと膝が震えた。

胃袋が鉛に変わり、直腸を押し下げるような感覚。

「娘に手を出す時は本気をお願い致します」

「は、はい」

千円札とゴム製品を財布にしまい、圭は玄関に走った。

駅前のヤオコーで醤油を買い、外に出ると星が瞬いていた。

昼間よりも気温は下がったものの、高い湿度は健在だ。

圭は荷台にクリスを乗せて自転車を漕ぐ。

「日本の夏は蒸し暑いのに」

「俺は、もつと暑い」

ワイシャツが汗に濡れて重い。

濡れた制服のズボンが足に絡み付き、トランクスの中が痒い。

「つか、尻が痒い。」

「ケイ、近道じゃ！」

「藤山公園は自転車の乗り入れ禁止だったの。しかも、痴漢が出るって噂じゃねーか」

「この時間帯なら誰もおらん。痴漢とて自転車に乗っていけば大丈夫じゃ」

「どんな理屈だよ」

とは言ったものの、藤山公園を突っ切ればかなり時間を節約できる。

腕っ節はそれなりなはずだし、ホッケーマスクの殺人鬼が出て来ない限り大丈夫だろう。

クリスが言った通り、公園内には誰もいなかった。

死にも似た静寂が予兆のように藤山公園を包んで、

「ファミコンウォーズが出るぞ！ファミコンウォーズが出るぞ！こいつはどえらいシミュレーション！やー！のめり込める！のめり込めるっ！」

空気を読まないクリスのせいで色々と台無しだった。

「突っ込みがないと寂しいんじゃないか？」

「元ネタが分からなくて突っ込めねーよ！」

「ケイが無知なだけではないか？この前、ワシはクラス担任とファミコンのマリオブラザーズや初代ガンダムの話で盛り上がったぞ。伝説の巨人イデオンのジエノサイドエンディングについても激論を交わしたな」

「クラス担任は四十歳！」

「ワシに死角はない」

寒気を覚えたのは公園の半ば、圭は思いっきりブレーキを握り締



めた。

茂みから人が飛び出してきたのだ。

自転車の後輪が横滑りして、クリスが振り落とされそうになる。舌打ちしながら圭は右足を軸に体勢を立て直した。

「危ないだろ！」

驚いたのはそいつも同じだったのだろう。

そいつ……佐藤美咲は無様に転倒し、青ざめた顔で茂みを指差した。

あ？ と圭は茂みを見つめて絶句した。

コートを着た大男が拳を振り上げていたのだ。

グシャリと一撃で押し潰された。

無惨に拉げた骨格が白々とした街灯の明かりを浴びて浮かび上がる。

濃密に立ち込める臭いは……買ったばかりの醤油のそれだ。

「危ねーな」

クリスを脇に抱えたまま、圭は男を睨み付けた。

微かに生ゴミが腐ったような臭いが漂っている。

男の体臭なのか、血肉の臭いなのか、どちらにしても面白くないことになりそうだ。

「チツ、仕方ないか」

後退った圭の手を美咲が掴んだ。

顔面蒼白、今にも泣き出しそうだ。

「アンタ、私を置いて逃げるつもりでしょ！」

「アホか！ 戦おうとしたに決まってるじゃねーか！」

「あんなバケモノにアンタが勝てる訳ないじゃない！」

「だったら、俺の手を掴むな！」

「こんな状況じゃなかったら、あんたの手なんて掴まないわよ！  
この藁！」

「どうでも良いが、来ておるぞ！」

美咲の腕を掴み返し、圭は大きく跳躍した。

「……っ！」

クリスと美咲が大きく目を見開く。

二人も担いだ状態で十メートル近い跳躍をしたのだから驚くのも無理はない。

「ここで大人しく待っていてくれよ」

「ちよつと、マジで戦うつもり？」

「だから、最初から戦うつもりだって言ったたる！」

二人から離れ、圭は改めて大男と対峙した。

多少の心得があると言っても実戦は初めてだ。

逡巡している内に大男が動いた。

戦術は稚拙で腕を振り回しながら突進するだけだ。

けれど、腕が旋回するたびに頬を打つ風が破壊力を物語る。

多分、まともに殴られたら動けなくなる。

「……ら、あつ！」

圭は旋回する腕を潜り抜け、渾身の蹴りを放った。

腰の捻りを利かせたお手本のような前蹴りだ。

多少の体重差があっても、大抵の相手は止まるはずなのだが、大

男は前蹴りをもともせず、両腕を振り下ろした。

ダブルスレッズハンマー……組んだ両手を相手の背中に叩きつけるプロレス技だ。

一瞬、頭の中が真っ白になった。

こんな時にプロレス技を使う馬鹿がいるのか？

いや、俺がガキの頃に小指を骨折しただけで意外に実戦的な技なのか？

「……ッ！」

ダブルスレッズハンマーがアスファルトを砕き、散弾のように飛び散った破片が圭の首筋を掠めた。

傷を抑えながら、圭は大男から離れる。

「いつまで逃げてるつもりじゃ！ 反撃せんか、反撃！」

ギャラリーは気楽で良いよな！ と圭は大男の懐に飛び込み、下

段回し蹴りを叩き込んだ。

ゴムの塊を蹴ったような感触に顔を顰める。

「ケイ！」

クリスの叫び声で我に返った時には遅かった。

咄嗟に跳躍したが、それに合わせるように大男が足を踏み出す。

避けられない！ と覚悟した次の瞬間、衝撃が下腹部で炸裂した。

嘔吐感に耐え、圭は大男の間合いから逃れる。

吐息が血生臭い。

目の前がチカチカする。

たった一撃で足にまでダメージが来てる。

「……ゆ、油断した」

「戦っている最中に動きを止めるからじゃ！」

「初めての实战なんだから、仕方がねーだろ！」

クリスと美咲の所まで戻ったことを誉めて欲しい。

舌打ちし、圭はポケットから財布を取り出した。

「今更、金を渡しても逃がしてくれそうにないぞ」

圭は財布から取り出した和紙を指で挟むように構えた。

財布の中身……数枚の千円札が風に飛ばされ、硬化がアスファル

トに落ちて澄んだ音を立てる。

できれば距離を取りたいが、

……雑鬼召還！

ドクンッ！ と心臓が大きく鼓動する。

赤く染まった視界が空間に残留する気を捉える。

気は万物の根源、森羅万象に宿るエネルギーだ。

石動の術士は気を視覚的に捉え、規則性を与えることで様々な現象を引き起こす。

圭は薄墨のような気を符に導く。

……『礫』！

密度を増した気が炎のように符を包み、ふわりと浮かび上がる。グジュグジュと赤い粘液が符から溢れ出し、ソフトボール大の球体を形成する。

『礫』は圭の命令に従うだけの最低ランクの式神だ。攻撃力は高い方ではないが、何度でも攻撃が可能だ。

「行け！」

圭の命令に従い、式神は鋭い牙を打ち鳴らしながら大男に襲い掛かった。

大男は式神を叩き落とそうと腕を振り回す。

だが、式神は大男の腕を擦り抜け、首の肉を食い千切る。

致命傷にも関わらず、大男は痛みを感じていないかのように腕を振り回した。

血さえ流れていないのだから、真つ当な人間じゃないのかも知れない。

大男が式神である可能性も否定できない。

「戻れ！」

あえて声に出し、圭は式神を引き戻した。

式神を大男との間に割り込ませ、圭は口の端を吊り上げる。

余力があると思いつまらせるためにありつた力の力で虚勢を張る。どれくらい睨み合っていたのか、先に動いたのは大男だった。

一步、二歩と後退り、圭に背を向けて逃げ出したのだ。

大男の気配が完全に消え去ってから圭はその場で尻餅を突いた。

「ケイ？」

「悪い、英世さんと小銭を回収してくれ」

「委員長、貴様も探せ」

「わ、分かっているわよ」

無理だろうな、と圭は溜息を吐いた。

クリスが集められたのは千円札一枚と数枚の硬化だけだった。

ふと見上げると鬼のような形相で美咲が圭を睨んでいた。

原因は美咲が汚らしそうに摘んだゴム製品だ。

「待て、お前は勘違いをしている」

「何がよ？」

「それは娘に手を出す時は本気でお願ひ致しますとセシルさんから預かったものだ」

「避妊くらいしなさいよ、このサル！」

美咲は頬を引き攣らせ、思いつきり圭の頬を殴った。

「ケイは魔法使いなのか？」

「あ？」

そんなことをクリスが言ったのは美咲をバス停に送り届けた後だ。思わず、問い返すとクリスに後頭部を叩かれた。

大男に殴られた腹も、美咲に殴られた頬も痛い。

それでも、クリスをおんぶする自分は偉いと思う。

「魔法みたいなのを使ったではないか。あれか？ 夜な夜な街を徘徊するバケモノを退治したり、魔法使い同士で殺し合いを繰り返していたりするのか？」

「魔法使いって言えば、魔法使いになるんじゃないの？ 半人前だから術士同士で殺し合ったり、バケモノ退治なんてしたことねーけど」

「あれだけ戦えるのに半人前なのか？ 今から修行をすればワシでもあれくらい戦えるようになるか？」

「俺の力つてのは血に宿ってるから無理だろうな……痛っ！ いきなり噛みつくな！」

いきなりクリスに噛みつかれ、圭は叫んだ。

「血を飲んだだけでは無理か」

「その理屈だと鳥を食ったら羽が生えるじゃねーか！ 要するに遺

伝。御先祖様に気を見るヤツがいて、そいつの特性を受け継いでいるんだよ」

「気など実在するのか？」

「俺にも詳しい理屈は分からねーけど、見えるんだから実在してるんだろ。まあ、同じ一族でも同じように見える訳じゃないみたいだから、理屈で説明できないのかもな」

「どう言うことじゃ？」

「俺は薄墨みたいな感じで気が見えるんだが、俺の兄貴は人によって気の色が違って見えたらしいんだよ。それだけじゃなくて、魂みたいなモノも見えたつばい」

「らしい？ つばい？」

「だから、俺が見てるものと違うんだよ。俺は気が人間の体に詰まっついていて、なくなった分だけ補填されてるように見えるのに、兄貴は魂みたいなモノが気を生み出してるって言ってたからな」

「うゝむ、量子力学チックじゃな。この世界そのものが重ね合わされた状態で観測した瞬間に収束しているのかも知れん。しかも、兄弟でも見え方に個人差がある。ふむ、これは調べる価値がありそうじゃ」

「そんな大層なものか？」

「大事じゃ。この世界そのものが観測された結果として物理法則を保っているのだとしたら物理法則なんぞ破綻してしまうぞ」

「俺にしてみたら物理法則が曖昧なんてのは当たり前のことと、破綻しにくいってのも当たり前のことなんだけどな」

「ていつ！」

「ぼかん！ と頭を小突かれ、圭は小さく呻いた。

「当たり前とはどういうことじゃ」

「昔はバケモノ退治の依頼が多かったらしいんだよ。けど、今は最盛期の千分の一くらいまで減ってる。これは俺の解釈なんだが、科学的な考え方が浸透してバケモノの生まれる余地ってのがなくなってるんじゃないかな？ 人間の無意識が物理法則を補強してると考

えれば、説明できるだろ」

「疑似科学みたいな話じゃな」

クリスは納得していないようだ。

「あの大男は何なのだ？」

「さあ？ ドーピングのせいで脳みそまで筋肉になったヤツか、俺みたいな術者のなれの果てか、俺の御先祖様みたいに覚つちまったヤツなのかも知れねーな。純粋なバケモノって可能性もなくはないけどな」

「戦うのか？」

「戦わない。戦う義理も義務も命の遣り取りをする覚悟もない」

「むう、学園伝奇バトルを期待していたんじゃが」

「申し訳ねーけど、正義のために戦えるほど俺は善良じゃないんだよ」

坂を上り、門を潜ると、

「ケイ兄ちゃん！」

ドカツ！ とカルが圭に突っ込んできた。

普段なら耐え切れたはずの衝撃だが、圭は意識を失った。

時々、行方不明になった兄を思い出す。

病弱な兄は白い寝巻姿で寂しそうに庭を眺めていた。

肌は上等な和紙のように白く、髪は首筋に掛かるほど。

汗で濡れた首筋を今でも夢に見る。

「……あ？」

目を覚ました圭はしばらく天井を見上げていた。

蛍光灯の白々とした光が目痛い。

どうやら、気絶していたらしい。

「目を、覚まされましたか？」

「あ、セシルさん」

「……二時間ほどになります」

枕元に正座していたセシルさんは圭が問い掛けるよりも早く答えた。

「あー、この格好は？」

今の圭はトランクスとＴシャツ姿だ。

問題はトランクスとＴシャツが圭のではないことでも、どのような経緯で着替えさせられたかでもない。

誰が着替えさせたか、である。

「……娘達が濡れたタオルで顔を冷やすんだと張り切り、バケツの水を掛けてしまったので私が」

圭は言葉に詰まった。

気まずいのはセシルさんも同じらしく頬を紅潮させ、恥ずかしそうに俯いている。

「見られちゃいました？」

「……っ！　そ、それは……夫が帰っておりませんし……夏とは言え」

息を呑み、セシルさんは言い淀んだ。

冗談っぽく言ったつもりなのだけれど、セシルさんは首筋まで真っ赤になっている。

セシルさんがなおも言い募ろうとした時、静かに襖が開いた。

「ケイ兄ちゃん、怒ってる？」

カルが怯えているかのように顔を覗かせる。

精神的に幼い彼女は人間関係が壊れることを恐れている。

きっと、カルは人間関係の脆さを知っているのだ。

「怒ってないよ」

「ホントに？」

「本当に。さっきのは少し調子が悪かっただけでカルのせいじゃない。だから、今日は勘弁して欲しいけど、いつもみたいに元気に体当たりしてくれると俺も嬉しい」

「うん、ケイ兄ちゃんが元気になったら体当たりするね！」



「ケイのお陰でカルも元氣を取り戻したようじゃな……何故、母上が顔を赤らめて硬直しておる？」

カルと入れ違いにクリスが顔を覗かせる。

多分、カルに付き添っていたのだろう。

「ふむ、あやしいの？」

「コホン……圭様、夜も更けて参りましたのが如何なさいますか？」

「泊まっついていけ、ケイ。最近は何かと物騒じゃ」

公園の出来事は話していないってことか、と圭は推測する。

「では、夕餉の準備が整うまでお風呂に入られては？」

「お言葉に甘えます」

「クリス、浴室まで案内を」

「うむ、こっちじゃ」

立ち上がり、圭はクリスを追う。

クリスは入浴を済ませたらしく、白いロングTシャツ、ツインテールも解いている。

「セシルさんに何て説明したんだ？」

「自転車を盗まれたと説明したんじゃが、セシルは嘘に気付いていないな……ここじゃ」

浴室は玄関の対面……と言っても玄関からは見えないうようになっているが……に位置している。

「ワシは部屋におるからな」

「了解、了解」

圭は洗濯かごに下着を脱ぎ捨て、浴室に入った。

浴槽は半植え込み式の檜造り、床と壁はタイル張りだ。

圭は木桶で湯を掬い、ゆっくりと肩から掛ける。

湯の温度は適温、ヒリヒリと痛むので視線を落とすと大男の攻撃を受けた箇所が赤黒く変色していた。傷み始めたバナナの皮に似ていなくもない。

「……何だかなあ」

湯船に浸かり、圭は呟いた。

ふと圭は視線を傾け、誰かが洗面所にいることに気付いた。  
クリスか？ いや、話の流れ的にカルかも……いやいや、セシル  
さんかも知れない。

水を掛けてしまったお詫びに背中を流しに来ましたみたいなの！

そうだよ、それ！

そうに違いない！

ガラガラと浴室の扉が開き、頬を緩ませた圭は振り向き、

デカツ！

カミツキガメを発見しました！

外来生物法に基づき冷凍処分をお願いします！

「ヤア、ケイ君。背中ヲ流シニ来タヨ」

「え？ ええっ？」

カミツキガメの本体……シャノンさんは親指を立て、男気ある笑  
みを浮かべた。

シャノンさんの身長は圭よりも頭一つ分高い。

肩幅が広く、ガツシリとした体格だ。

アメリカのホームコメディにでも出て来そうな陽気な二枚目と言  
った感じ。

「大丈夫、拙者八日本通デゴザルヨ」

「拙者と言ってる時点で危険な予感が！」

「ドレクライ日本通カト言ウト……子ドモト一緒ニ風呂ニ入ッテモ  
虐待扱イサレナイ、娘ガ男友達ヲ連レテ来タラ背中ヲ流スト知ッテ  
ルヨ」

「二つ目は違う！」

「サア！」

圭はシャノンさんに腕を引かれ、檜の風呂イスに座らされた。

「才客サ〜ン、何処カラ来タノ？」

「それも違うし！」

シャノンさんの微妙なギャグに耐え、シャノンさんの背中を流し……何故、俺はクリスの親父さんと浴槽に入っているんだろう？

そんなことを考えつつ、圭は隣でハミングするシャノンさんを見つめた。

「……この曲」

「歌八良イネ、歌八心ヲ潤シテクレル」

「親子揃ってオタクかよ！」

「ハハハツ、チョット小粋ナアメリカンジョークネ」

「アメリカじゃなくて、日本だよ！」

バシャとシャノンさんは叩きつけるようにお湯を自分の顔に掛けた。

「コレデモ、君ニ感謝シテイルンダヨ」

「感謝されることなんてしていませんよ」

「ズット、クリスハ難シイ子ナンドト思ツテタ」

シャノンさんは遠い目をして言った。

「……トテモ後悔シテイルヨ」

シャノンさんが何を言いたいのか、圭はよく分からない。

多分、シャノンさんは自分勝手な思い込みでクリスを傷つけたことを心の底から後悔しているのだろう。

## 第二章 『非日常の始まり』

薄く目蓋を開くと薄い光が室内を満たしていた。

見慣れた天井のはずなのに部屋の様子は記憶と違っていた。

こんなに俺の部屋は散らかってなかった。

こんなに良い匂いはしなかった。

ふと視線を下ろすと胸元が金色に輝いていた。

金色の正体は細く、しなやかなクリスの髪だ。

「う……ん」

クリスが小さく呻く。

露わになった鎖骨、汗に濡れた微かな膨らみ。

自分でも訳が分からないまま、圭はクリスを抱き締めていた。

ヤバい、とてつもなくヤバいことをしてる。

「……むう」

クリスがキスをせがむみたいにおとがいを逸らした。

桜色の唇が小さく開く。

「キ、キ、キスクらいなら」

「軽はずみな行動は死期を早めますが？」

こめかみに固い物を押しつけられ、圭は凍り付いた。

ゆっくりと視線だけを動かすとセシルさんが銀の回転弾倉式拳銃を構えていた。

「セ、セ、セシルさん……俺のこめかみに何を」

「S & W社製M60チーフスペシャルです。357マグナムを使用しておりますので、この距離なら即死できます。御不満でしたら、モスバーグ社製のショットガンM500の準備もございますが？」

「どつちにしろ、死ぬじゃん！ つーか、どうして、普通の御家庭に銃が！」

「以前、購入した銃を保管しているからですが？」

「じゃなくて、銃刀法違反！」

「問題ありません。この国には『無茶が通れば道理が引つ込む』と言う諺が伝わっておりますので」

「法律まで引つ込めた!」

「法律は、引つ込みません」

「あ、やっぱり」

「御自身のためにも警察の方には御内密に」

「サラツと脅迫されてる!」

「では、続きを」

「殺すと言つたばかりなのに!」

セシルさんは足音を立てずに部屋から出て行った。

「うゝむ、うるさいのお……何故、ケイがワシの布団につ?」

「今、起きたのかよ!」

クリスは不機嫌そうに唸り、もの凄い勢いで圭から離れた。

「ま、まさか、ワシに夜這いを! い、いかんぞ、ケイ! こ、この国には『男女七歳にして席を同じゅうせず』と言う諺があつてだな」

「夜這いに来たんじゃねーし」

「だったら、どうしてワシの布団に?」

「朝、起きたら隣でクリスが寝てたみたいなの?」

「待てい! その言い方だとワシがケイの布団に潜り込んだみたいではないか! 目が覚めたのならば、さっさと出て行け!」

「……無理だ」

「何故じゃ?」

「男だから」

「ま、ま、まさか」

エロゲーファンだけあり察して……、

「わ、ワシの布団で夢精「んな訳ねーだろ!」

察してなかった。

「……ッ!」

「露骨に怯えた顔をして後退るなよ。エロゲーで慣れてるだろ?」

「ゲームと現実を一緒にするでない！」

「お姉ちゃん、朝だよ！」

「スパン！ と昨日と同じようにカルが襖を開けた。  
「ん？」

カルは不思議そうに首を傾げ、

「いつの間に二人とも結婚したの？」

「結婚なんてしてねえ／おらん！」

「じゃ、ボクは第二婦人で良いや！」

「第二婦人！」

「うん、正妻は四人までオツケイだよ」

「それは複数でプレイするのもオツケイ？」

「何を聞いて……！」

「あまり良い趣味じゃないけど、折り合いを付けさせるのが家長の器だつて」

「ハーレム公認！」

「ハーレムが何か？」

いつの間にか、セシルさんがカルの背後に立っていた。

「お姉ちゃんが第一婦人で、ボクが第二婦人になるの！」

「それは随分と愉快な話ですね」

ニイイツとセシルさんは口の端を吊り上げた。

目は笑っておらず、愉快そうな雰囲気は欠片もない。

部屋の温度が下がったような気がするのも気のせいじゃないだろう。

ガクガクとクリスとカルが震えているのは予想される惨劇を想つてのことだろうか。

ちなみに圭のアレは縮み上がっていた。

「セシル、新聞ガナイヨ」

遠くからシャノンさんの声が響き、セシルさんはいつものビスクドールのような表情に戻る。

「三人とも着替えた後、リビングに集合です」

「……はい」

セシルさんがいなくなつてから十秒が過ぎ、圭は安堵の息を吐いた。

「セシルさんが本気だったら三回は死んでるな」

「母上は怒ると怖いのだ」

「うん、お母さんは怖いよね」

顔面蒼白でクリス、恥ずかしそうに頬を染めてカルが言う。

「母上は五年くらい海兵隊にいたからな」

「五年でセシルさんみたいになれるのか。凄いな、海兵隊」

「うん、凄いやね」

もじもじとカルは太股を擦り合わせ、蕩けたような溜息を吐いた。  
「俺は着替えてくる」

朝食のメニューはトースト、目玉焼き、ベーコン、肉団子の浮いたスープ、テーブルの中央に山と盛られたサラダだった。

プロテストメントであるシャノンさんとクリスはお祈り、故郷の神様を信仰しているカルもお祈り、セシルさんと圭は手の平を合わせて『いただきます』だったりする。

食事を食べ終えたのは七時、しばらくしてスーツ姿のシャノンさんと制服姿のカルが席を立った。

「セシル、行ッテキマス」

「お母さん、行つてきまゝす！」

むう、とシャノンさんは唇を突き出した。

セシルさんは娘二人と圭、シャノンさんを交互に見つめ、恥ずかしそうに俯く。俯いていても埒が明かないと判断したらしくシャノンさんに触れるだけのキスをする。

「行ッテクルヨ」

元気百倍と言った感じでシャノンさんは革製の鞆を手にリビンゲ

から出て行った。

シャノンさんに遅れて、カルモリビングから出て行く。  
ガウガウ！ とシロとハイイロの鳴き声。

セシルさんは手際よく皿を重ね合わせ、キッチンへ。

「……セシルさんって」

「ドイツ人並に堅いな。人前でイチャイチャするのは苦手と言っているし、去年の七夕祭で父と手を繋ぐのに一時間も悩んでおっただし、愛していると父上に面と向かって言ったのは一回きりだそうだ」

「よく結婚できたな」

「我が家の七不思議の一つだ」

「七つ目がないってオチだな」

「その場のノリで言っただけで深い意味はないぞ。それに我が家に不思議があったとしても三つくらいではないか？」

そうか？ と圭は内心首を傾げた。

セシルさんだけで二十六個くらい秘密を抱えてそうのだが。

「さて、そろそろ行くか」

時刻は七時半、自転車がないので学校に着くのはギリギリになるだろう。

「圭様、ガレージにある自転車をお使い下さい」

泡だらけの手をタオルで拭い、セシルさんは圭に自転車の鍵を手渡す。

「ありがとうございます、セシルさん」

「いえ、私の責任です」

「今度こそ行こうぜ」

自転車の鍵を握り締め、圭はクリスを伴ってガレージへ。

ガレージには軍隊で使っていそうな車とKAWASAKIとロゴの入ったバイクが止められていた。

「この車とバイクって、セシルさんの趣味か？」

「母上は燃費よりも走破性で車を選ぶ地球に優しくない女だ」

ふう、とクリスは溜息を吐いた。



「セシルさんの趣味はともかく早く学校に行こうぜ」  
自転車を見つめ、圭は苦笑い。  
ガレージにあった自転車は壊されたそれとそっくりだった。  
防犯登録を気にしなくて済むか、と圭は自転車のロックを外した。

学校に到着したのは昨日より少し早いくらいだった。

昨日と同じように2 - Aの教室に入ると優花の姿がなかった。

話し相手がないせいかわ、クリスは寂しそくに教科書を机の引き出しに移していた。

教室に入った時から美咲がチラチラと視線を向けていたが、口止めするつもりもないので圭は一時限目の教科書を取り出して軽く目を通す。

グツタリとした様子で女性教師が教室から出て行く以外は特別な事件もなく、四時限目が終わった。

セシルさんが作った弁当を食べ終え、屋上でまったりしていると美咲が不機嫌そうな顔でやって来た。

「何じゃ、委員長」

「……昨夜のお礼を言いに来たのよ」

「ケイ、フラグじゃ！ フラグが立ったぞ！」

「フラグって？」

「アドヴェンチャーゲームでは選択肢を選ぶとストーリーが分岐するんじゃが、その分岐条件をフラグと言うんじゃ。このシユチュエーションで適切な台詞を選べば、委員長ルートに進めるぞ！」

「面倒臭そうだから、委員長ルートは要らね」

「ちなみに自称 神であるワシとしては……ケイ、だらしな感じ  
で足を開け」

おう、と圭はだらしな感じで足を開いた。

「『跪いて、俺のアレを舐める』じゃ」

「舐めないわよ！」

「ひいつ！」

情けない声を上げ、圭は美咲が股間に振り下ろした足を掴んだ。

「受け止めた？」

「おま、お前……本気で潰そうとしただろ？」

「あ、あんな要求したんだから潰されて当然でしょ！」

「俺が言ったんじゃねーだろ！」

ふん！ と美咲は足を引いた。

凄いぞ、よく頑張った俺の反射神経！ と圭は胸を撫で下ろす。

「そ、その昨夜は……ありがと」

美咲はそっぽを向き、蚊の鳴くような声で言った。

「あまり人気のない所を通るなよ。いつも助けられるとは限らねーし、あんなヤツに関わりたくないんだよ」

「分かってる」

美咲を見送り、圭は深々と溜息を吐いた。

帰りのホームルームも終わり、いつもなら部活に行くはずの美咲が今日に限って教室に留まっていた。

「石動、ちょっと付き合って」

「手短に済ませてくれよ」

「ここじゃ、マズイから」

ふう、と圭は溜息を吐いた。

人気のない場所は自然と限られる。

その中で屋上を選んだのは無難な選択だろう。

「……職員室で聞いたんだけど、優花が昨日から家に帰ってないみたいなの」

「だから？」

自分でも呆れるほど冷たい声が出た。

「もしかしたら、昨夜の大男に誘拐されたのかも」

「で？」

「だから、協力してよ」

ふうう、と圭は溜息を吐いた。

あれだけ危険な目に遭いながら、美咲は危険性を理解していないらしい。

「俺は関わりたくないって言っただろ。第一、綾峰は本当に誘拐されたのか？ 仮に事件性があるにしても昨夜の一件に結びつけるのは短絡的だろ」

「それはそうだけど……万が一、あの大男に」

「万に一つの可能性を潰すために戦えつてののか？ ったく、馬鹿じゃねーの」

「そんなに友達を心配するのが悪いことなの！」

「自己陶醉しすぎなんだよ、馬鹿が」

「……っ！」

美咲が平手を見舞うが、発作的な行動だけに動きは読み易かった。

圭は欠伸を噛み殺しつつ、美咲の手首を掴んだ。

軽く腕を捻り、美咲をフェンスに押しつける。

「ちよ、離しなさいよ！」

「これが俺とお前の実力差。お前は強いよ。俺の見立てじゃ空手でお前に勝てるヤツなんて男でもそういないさ。けど、あくまでルールに守られている場合だ」

「……痛っ！」

強めに腕を捻ると美咲は苦痛に喘ぐ。

「で、あの大男……別に大男じゃなくても良いけど、ここで止めてくれると思うか？」

体を押しつけ、圭は美咲の耳元で囁いた。

「何をしておる！」

ちよつと視線を傾けると小柄な人影……クリスが跳び蹴り。

圭は美咲から離れ、クリスの跳び蹴りを躲した。

思いつきり空振りしたクリスは着地と同時に足を挫き、これ以上なくらい無様に転倒する。

「……うぐっ」

「何をやってるんだよ、お前は」

パン！ と乾いた音が響く。

クリスが差し伸べた手を払い除けたのだ。

「話は聞いていた！ 何故、ユーカが誘拐されたかも知れないのに動こうとせん！ それでも、ワシの下僕か！」

「そっちこそ俺の話を聞いてたか？ あんな外れたヤツに俺は関わりたくねーんだよ」

「こ、このヘタレ！ お前には頼まん！」

怒鳴りつけ、クリスは美咲と共に圭に背を向けた。

駅前のゲームセンターはいつも通り閑散としていた。

ハードなゲーマーは隣街のゲーセンに行ってしまうし、あまり筐体を入れ替えないので人気がないのだ。

それでも、一定数の顧客を確保しているのはある役割のためだった。

ゲームセンターの隅に設けられた申し訳程度の休憩所に高校生がだらしない格好で座っていた。

肌は浅黒く、がっしりした体格だ。腰に巻いた鎖、半端に染められた髪、耳に付けたピアス、こんな田舎で自己主張の激しいヤツである。

「……久しぶりだな」

「ああ、久しぶり」

最低限の挨拶を交わし、圭は男の隣に座った。

「なあ、コート姿の大男について何か知らないか？」

「……相変わらず情報の遅いヤツだ」

「家が完全に没落しちゃったから、情報のルートがここしかないんだよ」

このゲームセンターは圭のような未熟な術士の溜まり場だった。没落した一族の出身者が情報を提供し合い、被害を最小限に留めることを目的としている。

「……噂自体は去年からある。目撃証言もかなりの数だ」

「学校じゃ聞かぬーけど？」

「……死体が見つからなければ失踪事件として処理される。そして俺達は余計なことに関わらない」

「なるほどね」

こんなもんだ、と圭は溜息を吐いた。

ここにいる連中は中途半端な実力と青臭い正義感で身を滅ぼした实例を嫌と言うほど見ているのだ。

「……やりあったのか？」

「こつちの手の内を晒しただけになったけどな。アレは独覚だよな？」

「……十中八九、そうだ」

チツ、と圭は舌打ちをした。

独覚は師につくことなく悟りを開いた者と言う意味の仏教用語なのだが、術士の間では遺伝的要素がないのに術士として覚醒した者危険因子の代名詞として使われている。

理由は簡単だ。

独覚は容易く罪を犯す。

ある意味でクリスが使っていたファイル共有ソフトと同じだ。

裁かれないからと、行為をエスカレートさせ、犠牲者を生み出すのだ。

「仕方がねーな」

「……止めに行くのか？」

「自称・俺の御主人様とクラスメイトを、な。死んだ方がマシな目に遭うよりも、俺に心が折れるくらい痛い目に遭わされる方がマシ

だろっさ」

「……恨まれるぞ」

「あいつらが死ぬより恨まれる方がマシだ」

「……大した忠犬ぶりだ」

「言ってる」

吐き捨て、圭はゲームセンターを後にした。

日が沈み、公園は薄闇に包まれていた。

人気はなく、クリスと美咲の声だけが響いている。

あの大男が証拠の隠滅も計れないほど愚鈍だ、と二人は考えているのだろっ。

圭は素早く木の陰から木の陰に移動し、クリスの背後に回った。

這い蹲り、ぷりぷりとお尻を動かす姿は割とエロい。

「……おい、クリス」

ビクッ！ とクリスは驚いた猫のように飛び上がった。

「ケイか、あまり驚かせるな」

「もう一度だけ忠告しておく。この件に関わろうとするな。警察に任せて、お前は家でエロゲーでもやってろ」

「忠告など要らん。手伝うつもりがないのなら家に帰れ」

「そうか、そうだよな」

圭は頭を掻きながらクリスと距離を詰め、彼女の脇腹を蹴り上げた。

グボツ、とクリスが訳の分からない声を上げる。

空中で反転……宙に浮いているクリスを踏みつけ、地面に叩きつける。

ケハッ！ と息を詰まらせ、クリスは突然の凶行に目を白黒させている。もちろん、内臓が破裂しないように手加減はしている。

「……な、何をするんじゃ、ケイ」

「忠告を聞いてくれないから暴力に訴えてるんだよ」  
立ち上がるうとクリスが手足をばたつかせるが、圭はそれを許さない。

単純に体格差の問題だ。

「こ、この程度でワシを止められると」

「思ってたねーよ」

足をどかすとクリスは体を起こし、憎悪に燃える瞳で圭を睨んだ。  
一瞬、クリスの口元が緩んだのを圭は見逃さない。  
ダンッ！ と地面を蹴る音。

背後から接近した美咲がハイキックを放ったのだ。

圭は軸足を刈るようにタックル、そのまま美咲を押し倒した。

勘弁しろよ！ と圭が拳を振り上げたその時、クリスが叫んだ。

「……ケイツ！」

嫌な予感がして、圭はクリスに向かって手を突き出す。

衝撃、光が眼球の奥で炸裂する。

クリスが隠し持っていたナイフで圭を刺したのだ。

自分で刺したのに顔面蒼白、滑稽なほど膝が震えている。

とうとう自分の体重を支えられなくなり、クリスはその場で尻餅を突いた。

「こ、これがワシの覚悟じゃー！」

圭は立ち上がり、手の平と甲を交互に見る。

本気で殺そうとしたのか、T字型のナイフは手を貫通していた。

「だから？」

「ヒイツ！」

圭が傷口を抉るようにナイフを抜くとクリスは小さな悲鳴を上げた。  
た。

「魔法使いか、聞いてきたよな？ あの時は言わなかったけど、俺の御先祖様は医者だったらしくてさ」

「な、何が言いたいんじゃない？」

「医者ならではのテクニクってのが伝わってるんだよ。今みたい

に痛覚の遮断もできるし、俺みたいな未熟者でも自分の体なら損傷箇所の修復ができる」

圭は手の平をクリスに向けた。

血が沸騰したように泡立ち、切断された筋肉が蠢いている。

手の平と甲の違いはあるが、クリスも同じ光景を見ているはずだ。自分でもグロテスクさに吐き気が込み上げてくる。

ゲエツ、とクリスはその場で嘔吐した。

「んで、こう言うこともできる」

圭はクリスの髪を掴んで立ち上がらせ、血で濡れた手の平を口元に押しつける。

クリスは噛みつくこともできずにされるがままだ。

「……刻め」

小さく呟くとクリスは電流を流されたように仰け反った。

グツ、と毛を吐き出す犬のような声が喉から漏れる。

「な、何をしてるの？」

「血液を媒介にした感覚支配……今、クリスは麻酔なしで体を切り刻まれるような痛みを味わってる」

ピチャピチャとクリスの股間から水が滴り落ちる。

気絶もできない激痛に失禁したのだ。

圭が感覚支配を解いても、クリスは不規則な呼吸を繰り返していた。

「激痛で人格をぶち壊すことも、快楽で狂わせることだって、欠伸が出るほど簡単だ。だからさ、優花の件は諦める」

「そんなこと」

美咲は折れたな、と圭は安堵の息を吐いた。

「……そんなこと、できる訳なからう」

答えたのはクリスだった。

「で、お前に何ができるんだよ？」

「ケイこそ、どうして？」

何度目の溜息だよ、と圭は空を仰いだ。



「……俺はさ、お前らのことが嫌いじゃないんだよ。むしろ、好きだって感じてる。だから、お前らが死んだ方がマシって目に遭わされるのは嫌なんだよ」

「そうではない！ それだけの力がありながら、どうして、戦わない！」

「戦う義理も義務も覚悟もねーからだよ。軽蔑してくれても良いぜ。けど、お前らも自分の両親が頭を潰されて殺されたら、同じことを考えるだろうさ」

「ケイの言いたいことは分かったが、ワシらの邪魔をせんでくれ」  
クリスは優花の痕跡を探そうと地面を這う。

「分かってねーだろ」

圭は地面に倒れ込んだクリスを片手で吊し上げ、吐息が掛かるほど距離で睨んだ。

「ケイはワシらを止めようとしている。だから、ワシらを殺せない」

「両腕両脚の骨を砕けば諦めるか？」

「ほ、骨を砕きたいなら砕け！ それでも、ワシらは、いや、ワシはユー力を探す！」

血で濡れた手を見せるとクリスは惨めったらしいほど体を震わせた。

「何処まで耐えられる？」

「無論、死ぬまでじゃ！」

格好良いのは台詞だけでクリスは震えていた。

一秒、二秒……どれくらい睨み合っていたらどうか。

「……分かった」

溜息を吐き、圭はクリスから手を離れた。

「……ケイ？」

「黙れ、馬鹿！ 分かってたんだよ、そう言うヤツだって！ 何の力もないくせに吠えるし、痛い目にあっても反省しねーしさ！ つか、小便を漏らすくらい痛いんだったら諦めるだろ、邪魔された

からとか言い訳して！」

圭は頭を抱えて叫んだ。

「俺に、謝れ！」

「何たる逆ギレ！ ケイこそワシに謝れ！」

「うるせえ！ お前に嫌われる覚悟で止めに来たのに止まってくれないなら、力を貸すしかねーだろ！」

ポカンと呆気に取られたようにクリスは圭を見つめた。

「ケイ……もしかして、最初から？」

「そうだよ、お前が諦めなければ力を貸すつもりだったんだよ」

「ぐぬ、ぬぐぐぐ……ムキイイ！」

錯乱したようにクリスが圭に殴り掛かる。

じゃれてる猫みたいだ、と思っていたらクリスのジャンピングアツパーが顎を捉えた。

軽く脳を揺らされて圭が尻餅を突くとクリスはマウント。

パンパン！ とリズムカルな平手打ち。

「ワ、ワシは本当に、本当に怖かったのだぞ！」

「……悪かったよ」

「反省が足りん！」

パン！ と平手打ち。

ようやく気が済んだのか、クリスは荒い呼吸を繰り返しながら圭から離れた。

「とにかく、ここから離れよう」

「まだ、手掛かりを掴んでおらん！」

「良いから歩きながら話す。あ、一人で歩けるか？」

「……」

圭は黙り込んでいるクリスを抱き上げた。

「小便臭「お前のせいじゃ！」

「あんなマネしたくせに……やっぱり付き合ってるんじゃない。いつも二人で登校してるし」

「まあ、そう言う風に見えるよな」

周囲を警戒しながら圭は公園の出口を目指す。

「クリスは長く歩けないんだよ」

「え？ でも、体育の授業に参加してるじゃない」

「ワシは普通に歩ける……ケイが勝手に手を貸すだけじゃ」

クリスは不満そうに唇を尖らせる。

「それで一年以上も？」

「別にワシは頼んでおらん！」

「俺が勝手に手を貸して、凶々しく飯をたかってるんだよな」

美咲は訳が分からないとでも言うように眉根を寄せた。

「それって、好きだからじゃないの？」

「クリスのことは好きだぜ。こいつと一緒にいると楽しいからな」

嘘じゃないぞ、と圭は笑った。

公園の入口に止めた自転車の荷台にクリスを乗せ、手で自転車を進める。

「今回の事件についてなんだが、去年から続いているらしい」

「「は？」」

クリスと美咲が同時に声を上げた。

「警察は？」

「事件性がなけりゃ、本腰を入れてくれないだろ」

「じゃあ、どうするの？」

「何故、二人ともワシを見る」

「天才ならプロファイリングくらい」

「できるか！ あれは統計学で、元になるデータがなければどうにもならん！」

クリスは圭の思い込みを切り捨てた。

「とにかく……明日、優花が家に帰っていないかを確認してからだな」

昨日と同じように美咲をバス停まで送り、圭は自転車を押しながら坂を上る。

「……クリス」

「何じゃ、ケイ？」

「どうして、クリスは優花のためにがんばれるんだ？」

「友達だからじゃ、それ以外に理由なんぞ必要ない」

「そうか」

喉元まで迫り上がる言葉を圭は呑み込んだ。

嘘にしても、建前にしても、意地を張り通せるのならクリスの覚悟は本物だ。

### 第三章 『非日常の連続』

翌日も優花の姿は教室になかった。

クリスも、美咲も何かを言いたそうな視線を向けてきたが、圭は無視して使えそうな要素を考える。

優花が家に帰っているかを調べるのは簡単、問題はその先だ。溜まり場で情報を獲得しようにも基本的にあそこは被害を最小限に留めるための情報交換所だから頼りにならない。

両親が残したコネクションは結構な金額が必要になるし、相手にしてくれるか微妙な所だ。

「あ、あの、石動君。先生の授業で分からない所がありましたか？」

「あ？」

「凄く怖そうな顔をしていたから」

ふうふう、と圭は長めの溜息を吐いた。

「朝から腹の調子が今一つで、先生の授業は分かり易いですよ」

実の所、分かり易いかと言われれば普通としか答えようのない内容なのだけど、ちよつとしたリップサービスだ。

何故か、女性教師は頬を赤らめていたが、その日の授業は問題なく終わった。

帰りのホームルームも終わり、クリスと美咲が圭に近づいてくる。

「……優花の家に行く口実だけど」

「授業中にそんなことを考えてたの？」

「重要だろ」

「はいはい、進路調査のプリントを持って行って担任に話くらい通したわよ。アンタにしても私達にしても素人なんだから協力くらいしないよ」

「ワシもシリアルキラーについて可能な限り調べたぞ。ユーカの家は県道沿いの新興住宅地じゃからそれまでに説明してやろう」

エツヘン、とクリスは慎ましい胸を張った。

「了解、了解。俺の方は情報網と両親が残したコネが使えると思う」

FBI捜査官ロバート・K・レスラーによれば、連続殺人犯は論理的な行動を取る秩序型と非論理的な行動を取る無秩序型に分類できるとらしい。

無秩序型の犯人は精神的な病を抱えているケースが多く、その症状は時間が経つにつれて悪化していく。おおよその目安として十五歳で発病した場合、十年ほどで最初の殺人を犯すそうだ。

クリスが例として実在した秩序型連続殺人犯の詳細な説明を終えた頃、優花の家に辿り着いた。

優花の家は二階建て、低い塀で囲まれた典型的な建て売り住宅だった。

「二人とも顔色が悪いぞ」

「……お前もな」

三人とも顔面蒼白だ。当然だ。友達が暴行を受けた挙げ句に拷問じみた殺され方をするかも知れないのだ。これで顔色一つ変えなかつたら、そっちの方がどうかしている。

「吐いて良いかしら？」

「我慢しろ！ クリス、優花の部屋は何処か分かるか？」

「二階、ベランダのある部屋じゃ」

「塀を足場にすれば跳べるな」

「ワイヤーアクション並じゃな！」

「超能力者のくせに姿くらい消せないの？ 光を屈折させるとかして」

「光を屈折させるくらいはできるんだが」

「……委員長、どう言う風に人間がモノを見ているか知っとるか？」  
クリスは憐れむような視線を美咲に向けた。

「網膜？」

「いや、まあ、網膜なんじゃが……もの凄く乱暴に言つとじゃな。光が物体に当たるとその光が反射し、反射した光を網膜が電気信号に変える。ここまでは分かるな？」

「……ええ」

「光を屈折させると言うことはケイにも光が届かんと言うことじゃぞ？」

「あゝ、なるほどね」

流石の美咲もバツが悪そうに頷く。

「じゃ、チャイムをよろしく」

美咲がチャイムを鳴らし、しばらくしてドアノブが軋んだ。

ドアが開くタイミングで圭は扉に飛び乗り、全力で垂直に跳んだ。ベランダの手すりを掴み、体を引き上げる。

こつそりと出窓から部屋に侵入し、圭は動きを止めた。

女性教師と目が合ったのだ。

悲鳴を上げる時間すら与えず、圭は女性教師の鳩尾を一撃。

白目を剥いて倒れた女性教師を床に寝かせ、

「ヤバツ、気絶させちまった」

机の上にあつた紙に『今日の出来事は黙っている。誰かに話したら』と途中まで書いた所で誰かが階段を登る音が響いた。

女性教師のポケットから携帯を抜き取り、胸の谷間に紙を差し込む。

慌ててベランダから飛び降り、

「逃げるぞ！」

一目散にその場から逃げ出した。

「って、マジで犯罪者じゃない！」

「悪かったよ。けど、情報が手に入るかも知れないだろ！」

次の目的地……駅前のゲームセンターに向かいながら、圭と美咲は怒鳴り合った。

「どうだ、クリス？」

「うむ、パスワードが掛かっておるぞ」

「じゃあ、携帯から情報を引き出すのは諦めましょ」

「ワシはパスワードが掛かっていると云っただけじゃぞ」

クリスはパスワードの入力画面に数字を入力、

「む、プリセットのパスワードを変更するとは防犯意識が高いの」

クリスが複雑な操作をすると液晶が黒く染まり、四桁の数字が表示された。

バッテリーを抜いて携帯電話を再起動。

四桁の数字を入力すると軽やかな電子音と共にメール画面が開いた。

「何をしたの？」

「テストモードを利用して、パスワードを表示させたんじや」

「そんな機能があるんなら、パスワードの意味がないじゃない」

「工場関係者しか知らない裏技じや。大した情報がないの。アドレスの登録件数が十件とは交友範囲が狭すぎじや。メールでケイのことを愚痴つとるな。可哀想な子だから理解してあげなくちゃとか……これはこれでデータをコピーしておくか、脅迫材料に使えるかも知れん」

クリスはSDカードに携帯の情報をコピー、赤外線機能を利用して自分の携帯に電話番号とメールアドレスを登録する。

「クリス、もの凄く手慣れてないか？」

「この手の作業は好きじやからな」

「このままだと警察に捕まりそうね」

ふうう、と美咲が重々しい溜息を吐いた。

「安心しろ、委員長。この国には『勝てば官軍』と言う諺がある」

「『負ければ賊軍』って続くんだけど、知ってる？」

「何を言うかと思えば、警察に厄介になるとしてもケイだけじや」



「それもそうね」

「俺だけ捕まるのかよ!」

「不法侵入したのも、副担任を殴ったのも、携帯を盗んだのもケイではないか」

「お前らも関わってるじゃん!」

「はて、ワシらはプリントを届けに行っただけじゃが?」

「そうね、いきなり石動が降ってきたから驚いたわ」

「おーい!」

「優秀な弁護士を付けてやるから、死んでもワシらの名前を出すな」

「犯罪者みたいな台詞を!」

「そこまでケイが気にするのなら」

「いやいや、気にするだろ。下手したら前科者だぞ」

「ククク、あの女教師を脅迫するか。なぐに、あの手のタイプは少し脅迫すれば落ちるはずじゃ」

クリスは大河学園に連絡、携帯電話を拾ったと嘘を吐き、六時に届けると一方的に約束して電話を切った。

「これで罪が重くなるわね」

「こうなったら覚悟を決めるしかねーな」

圭がゲームセンターの駐輪場に自転車を止めるとクリスは荷台から飛び降りた。

大人しく待っているつもりはないらしい。

店内に入るとスピーカーカー音が頬を打つ。

圭は人気のない通路を擦り抜け、休憩所のベンチに腰を下ろした。

「……説得は失敗だったか」

「ああ、大失「何を格好つけとるんじゃ」

空気を読もうとしないクリスは薄い胸を張って仁王立ち。

「あの大男についての情報を寄越せ」

「……もう話すことはない」

「本当か?」

「……俺は、俺達は嘘を吐かない。そうしなければ被害を最小限に

抑えると言つ目的を達成できないからだ」

「分かった」

男の瞳に何を見たのか、クリスは静かに答えた。

「行くぞ、ケイ」

「おう」

「……これは独り言だが」

クリスと圭が背を向けると同時に男が言った。

「今、どの一族も上層部が騒がしい。俺達まで情報は下りてこないが、新しい勢力が現れたのかも知れない」

「そんなヤツまでいるのかよ」

「……あくまで不確定な情報だ」

了解、と圭は軽く応じた。

ゲームセンターから出ると軽やかな電子音が鳴り響いた。

女性教師の携帯電話が鳴っているのだ。

クリスは女性教師の携帯電話を取り出し、

「……ワシじゃ」

「……」

「ふむ、今から携帯電話を届けに行くつもりじゃ。場所は……お互いに聞かれたくない話もあるだろうし、屋上でどうじゃ？」

「……」

「言っておくが、誰かに相談しようと思うな。なぐに、脅しではない。これは対等な取引じゃ」

対等な取引をするつもりなんてハナからねーぞ、と言わんばかりの邪悪な笑みをクリスは浮かべた。

風が吹いていた。

爽快さなんて欠片もない、茹だったような大気を掻き回すだけの不快な風だ。

空を見上げるとクリスと目が合った。

給水塔の上に隠れているのだ。

ふうふう、と圭は溜息を吐いた。

口止めに成功しても、失敗しても内申点は酷いことになりそうだ。

ギイと鉄扉が軋みながら開いた。

女性教師は小動物のように周囲を見渡し、圭を見るなり頬を引き

攣らせた。

圭は女性教師に歩み寄り、練習した通り凶悪な笑みを浮かべた。

「あのさあ、呼んだ理由くらい分かるよな」

「ッ！」

女性教師が小さく息を呑んだ。

「お、お金に困ってるなら」

「あ？」

ガクガクと女性教師の膝が震えている。

セシルさんに脅されてる時の俺もこんな感じだったんだろうな、とちよつとだけ共感する。

「そう言えば、メールで可哀想な子だからとか言ってたもんな」

「……パスワードが掛けてあったのに」

「もう少しパスワードは捻った方が良いぜ」

こんなことで口止めできるんだろうか。事情を説明して協力を仰いだ方が良いと思うのだが、それを言ったら『お前は何をした！』とクリスに首を絞められた。

脅せば黙ると言うクリスの見解もエロゲーの知識が元になってるので今一つ信用できない。

「金なんて要らねーよ」

「……ふう」

女性教師は俯き、

「だからさ」

圭が囁いた瞬間、女性教師が動いた。

左目に焼け付くような痛み。

女性教師が隠し持っていた催涙スプレーを噴射したのだ。  
バチバチと青白い光を放ちながらスタンロッドが迫る。

こっちは袖の中に隠していたらしい。

圭は素早く女性教師の脇に回り込み、スタンロッドの柄を蹴り上げた。

紐を巻き付けていなかったため、スタンロッドがすっぽ抜けたが、女性教師は催涙スプレー片手に抵抗、圭が怯んでいる隙に特殊警棒で武装する。

特殊警棒を振り回し、圭が近づこうとしたら催涙スプレーで牽制。格闘経験のなさを補って余りあるコンボだが、基礎体力の低さは補えない。

特殊警棒を空振りするたびにスピードが落ち、二分が過ぎる頃には呼吸もままならないような有様だ。

女性教師が特殊警棒を突き出す。

圭は女性教師の脇に回り込み、足払いを仕掛けた。

無造作に足を蹴っただけだが、女性教師はこれ以上ないくらい無様に転倒した。

ストッキングが破け、何年も陽を浴びていないような白い肌が剥き出しになる。

ゴクリと圭は白い肌とストッキングのコントラストに艶めかしさに生唾を飲んだ。

頭を抑えつけるか、腕を捻れば十分だろう、と圭が腰を屈めた瞬間、女性教師が催涙スプレーを噴射した。

これは予想済み。手の平をノズルに押しつける。

ヒリヒリと火傷したみたいに皮膚が痛んだが、甘んじて受けるべきだろう……とか余裕をぶっこいていたなら、ガッ！ と頭蓋骨が陥没しそうな勢いで殴られた。

「ヒイ……ッ！」

ボタボタと頭から出血。

悲鳴を上げながらも、女性教師はトドメとばかりに特殊警棒を振

り下ろす。

ガツと二度目の衝撃に血が溢れる。

ガガツと三度目の衝撃に視界が赤く染まる。

余裕をぶっこいてたら、窮鼠猫を噛むどころの騒ぎじゃねーぞ！

三回も本気で殴りやがって、怯えてるよつでヤル気満々ですか？

ブラウスが血で濡れて、フリルのお化けみたいなブラジャーが透ける。

「こ、このアマー！」

「ヒイツ！」

催涙スプレーと特殊警棒を力任せに奪い取り、

「こ、ここのアマー！ 思いつき殴りやがって！ そっちがその気ならヤツてやるよー！」

「いや、助けて……お母さん！」

「う、うるさい、こ、こ、こんな所にノコノコと一人で来やがって

……こ、こ、このオツパイめ！ け、けしからん、オツパイだ！」

「何が、けしからんオツパイよ！」

美咲に蹴られ、圭は吹っ飛んだ。

圭はド派手に転がり、その勢いを利用して立ち上がる。

「何しやがる！」

「アンタを止めたに決まってるでしょうが！ 一撃されただけで錯乱して襲い掛かるなんて、脳みそが腐ってるんじゃないの！」

「三回も特殊警棒で殴られてるだろうが！ お前こそ、眼球が腐ってんじゃねーの！」

ふえ〜ん、と女性教師は美咲に抱きついて泣きじゃくった。

「いきなり反撃してくるとは意外にアグレッシブじゃな」

見上げると、クリスがハシゴを下りていた。

シヨーツの色は黒、シンプルなデザインのローレグだった。

「にゃ、何を見とる！」

慌ててスカートを抑えたクリスが落下。

圭はクリスを抱き留め、ゆっくりと地面に下ろした。

「だが、これで面白いムービーが撮れたな」

邪悪な笑みを浮かべ、クリスは女性教師に自分の携帯電話を突き出した。

「ククク、錯乱して生徒に襲い掛かる女性教師。このムービーをバラまかれたくなければワシらに協力せい」

「……そんなこと」

ガチガチと女性教師は震えていた。

縋るように美咲を見るが、残念ながら美咲はこちら側の人間だ。

「で、でも、それは石動君が」

「一部始終を眺めていたが、ケイは脅迫なんぞしておらんぞ。それに、そんな話を誰が信じる？ クフフ、この不景気に懲戒免職された教員を雇ってくれる企業があるかの？ ここはワシらに協力するべきではないか？」

矢継ぎ早に言葉を浴びせ掛け、クリスは女性教師から思考能力を奪う。

ポロポロと女性教師は大粒の涙を溢れさせた。

正直、胸が痛い。多分、この瞬間にも女性教師が積み重ねた努力とか、自分はこれだけやってるんだぞ！ って言うプライドを踏みにじっているのだ。

「……クリス」

「何じゃ、ケイ？」

「動画を削除しろ」

「だったら、どうやって口封じをするつもりじゃ？」

「……こうするんだよ」

「っっ！」

クリスと美咲が息を呑んだ。

圭がその場で土下座したからだ。

「先生、申し訳ありませんでした！」

「ケイ！ 男が軽々しく土下座なんぞするものではない！」

「軽々しくなんかねーよ！」

何しろ、これが人生で最初の土下座だ。

「先生……っ！」

「はひっ！」

「自分勝手なことをほざいているのも、先生が俺のことをあまり好きじゃないのも承知しています。先生が……俺のことを訴えるなら罪を償う覚悟もあります。けど、優花を助けるまで待つて欲しいんです」

「綾峰さんの件、知っていたんですか？」

「優花を攫った犯人にも心当たりがあります。本当なら警察に任せるのが一番なんでしょうけど、それができない相手かも知れないんです。だから、見逃して下さい！」

「えっ、あの……分かりましたけど、その代わりお願いしたいことが」

「俺にできることなら……何でもします。いえ、させて下さい！」  
良かったですう、と女性教師は満面の笑みを浮かべた。

特殊警棒で殴られた頭はパツクリと割れたままだが、圭は血流を遮断して出血を抑えていた。

『念のために消毒を』と言う話になり、四人で保健室に移動。け、けしからんオツパイが目の前で揺れている。

ブラウスについた血は乾いて枯葉色、オツパイの谷間にチラチラと視線を向けてしまう。

「本当に自分で血を止められるんですね」

「ええ、まあ」

と、止まれ、オツパイ！ 揺れるな、オツパイ！ これ以上、俺の心を掻き乱さないでくれ！ と圭は荒い呼吸を繰り返して精神を集中する。

ふと横を見るとクリスは不機嫌そうな顔で、美咲は虫でも見るみ

たいな目で圭を睨んでいた。

二人とも面白くなさそうである。

「すみません、傷を塞ぐんで」

「自分で塞げるんですか？」

見せて見せて、と言わんばかりに女性教師が身を乗り出す。

オツパイの谷間が、オツパイの谷間が、この手にある柔らかな感触は！

ドブツ！ と集中力が途切れ、血が噴き出した。

「ヒイツ！」

悲鳴を上げ、女性教師はその場に尻餅を突いた。

でも、これで集中できる。

心臓の辺りで拳を握り、圭は意識を集中させる。

血液が泡立ち、裂けた皮膚がゆっくりと塞がる。

「医者いらすじやな」

「自分の気を消費してるから疲れるんだよ、これ」

「ん？」

クリスは訳が分からないと言うように首を傾げた。

「術を使う時、俺は基本的に空間に残留した気を使ってるんだが、

微調整が今一つだから傷を治す時は自分の気を使ってるんだよ」

「MPの代わりにHPを消費するようなものか？」

「そんな感じ。熟達すれば周囲の気を使って傷を治せるし、敵の攻撃を先読みしたり、思考を読み取ったり、死体を一時的に動かすこともできるんだが……」

カルの言葉じゃないが、あまり良い趣味とは言えない。

生前の記憶を保っていたとしても生命力の供給を絶ってしまえば死体に戻る。

「意外に不便なのだな」

「術も拳銃で代用が利くし、頭を潰されたら死ぬしな」

「ちよつと、そんなことを話してる場合じゃないでしょ」

「そうは言っても」



圭とクリスは顔を見合わせた。

「収穫と言えばユーカが家に帰っていないくらいじゃからな」

「それはそうだけど……石動のコネはどうなったの？」

「それなんだけど、どれくらい金を出せる？」

「この期に及んでお金を取る気？」

「情報料が必要なんだよ。ちなみに俺は金なんてねーぞ」

「私は、貯金を切り崩せば二十万くらい」

圭と美咲が期待を込めて見つめると女性教師は慌てたように手を振った。

「せ、先生は全然ないです！ 有利子の奨学金も返さなくちゃいけないくて、資料とか、服とか、お酒も飲んじゃったりしたり……十萬くらいなら」

「高校生じゃカードローンも組めないし、先生にそこまでさせるのは」

と言いつつ、チラリと圭は視線を向ける。

「はうろう、分かり「ワシが出すぞ」」

クリスが何でもなさそうに言い、薄っぺらい財布からカードを取り出す。

「キヤッシュカードか？」

「クレジットカードじゃ」

クレジットカードって黒いんだ、と圭が場違いな感想を抱いていると女性教師と美咲が身を乗り出した。

「「ぶ、ブラックカード」」

「セシルさんに怒られないか？」

「……ワシはこう見えても大卒のインテリで、ハイテクパテントで個人的にも金持ちなんじゃが？」

「だから？」

「このクレジットカードはワシが自由に使えると言っことじゃ」  
エッヘン、とクリスは慎ましい胸を張った。

クリスの家まで続く坂の麓、県道と国道が交差するそこにMのマークでお馴染みのファーストフード店がある。

圭はポテトとコーラを交互に口に運びながら情報提供者を待っていた。

ポケットの封筒には一万円札が百枚。

空になりかけたコーラを啜っていると、白いクラウンが駐車場に止まった。

クラウンから降りたのはスーツを着た男だ。

四十代半ばくらいで、オールバックに撫でつけた髪には白髪が多く交じっている。

男はレジをスルーし、圭の隣に腰を下ろした。

「いやあ、久しぶりだね」

「父さんと母さんの葬式以来ですか」

「ああ、そうだったね」

疲れているように感じるのは気のせいじゃないだろう。

「もう石動とは切れたと思っただけだね」

「やっぱ、本家は動いていないんですか」

「君の両親と違って、あの連中は自分勝手に動くからね。そう言う意味じゃ、動いてくれない方が気が楽だよ」

圭は息を吐き、封筒をテーブルに乗せた。

「こう言うことを高校生がするのは感心しないね」

「俺だっけしてたくないですよ」

男は封筒の中身を半分ほど抜き取り、スーツの内ポケットにねじ込んだ。

「半分で良いんですか？」

「今回、用意したのは使い回しだね。と言っても使ったのは昨日だから情報の鮮度は問題ない。学割みたいなものだと思って構わないよ」

男はA5サイズの茶封筒……厚さ的にDVDではなく紙のようだ。  
「紙は証拠隠滅が楽だね」  
「パソコンがないから助かりますけど」  
「私はこれで……金髪のガールフレンドによるしく」  
男は圭の肩を叩き、悠々と店を出て行った。  
「ケイ、どうじゃ?」  
「どうも舐められてるみたいだ」  
「ふむ、これか」  
クリスは封筒の口から資料を盗み見る。  
「こんなに早く資料を用意できるなんて何者じゃ?」  
「大川警察署の刑事」  
「警察を信じられなくなるわね」  
「けど、そのお陰で優花を助けられるかも知れないんだぜ」  
「そうですよ。昔から大事の前の小事と言いまして、今は優花さんの救出を優先させるべきです」  
ズゴーと女性教師はストレートティーを啜った。  
圭、クリス、美咲の三人は顔を見合わせ、  
「先生、このタイミングで言うのは申し訳ないんですが」  
「はい?」  
女性教師は可愛らしく首を傾げた。  
「どうして、あんたがここにいるんだよ?」  
「先生、ここにいちやダメですか?」  
「貴様はもう用済みじゃ。さっさと帰れ!」  
「そ、そんな、先生だって放課後探偵団の一員ですよ!」  
「そんな名前は名乗ってねーし!」  
「うう、分かりました」  
女性教師は打ちのめされた感じで去っていく。  
もう少し強く生きて欲しいなあ、と思わないでもない。  
「……む、待て!」  
「え!」

嬉しそうに振り返った女性教師の顔が絶望に歪むまで時間は掛からなかった。

「『はううう、怖いですう』と女性教師は言っている」

「便利だけど、気持ち悪いわね」

藤山公園の茂みに身を隠しつつ、圭達は女性教師を追跡する。辺りは真っ暗、気持はない。

「この圏捜査って問題あるんじゃない？」

「ワシもそう思うが、打てるだけの手は全て打っておくべきじゃ」「クリスが圭の背中答える。

「昨日から馬鹿な遣り取りをした記憶しかないのに、こんなので優花を助けられるの？」

ガジガジと美咲は苛立った様子で親指の爪を噛んだ。

「絶望的な状況下で大切か知っておるか、委員長？」

「諦めないこと？」

「それは大前提じゃ。母上からの受け売りになるが、ユーモアが必要になるそうじゃ」

「は？」

二人の会話を聞きながら圭は追跡を続行する。

へううう、こんなことなら断れば良かった。

痴漢だけじゃ済みそうにないですよ、と女性教師は愚痴ばかりだ。そんな愚痴を聞くために術で視力と聴力を引き上げている訳じゃないのだが。

「これがない組織は恐ろしく脆いとも言っていたな。ポジティブな要素にも目を向け、色々な角度から検証することが大切と言っことじゃ」

「ポジティブって、何があるのよ？」

「ケイが仲間になってくれたし、ユーカが家に帰っていないと分か

った。失踪者のリストも手に入ったではないか……ケイ、様子はどうじゃ？」

「『や、止めて下さい！ 警察を呼びますよ！』と女性教師は三人組の男に茂みに連れ込まれそうになってる」

「助けに行くんじゃ！」

「その前に」

圭は握り拳くらいの石を手に取り、思いっきりぶん投げた。

石は痴漢の一人に命中。

当たり所が良かったのか、男は前のめりに倒れた。

「残り二人」

「も、もの凄く危険な倒れ方をしたように見えるのはワシだけか？」

「気のせいだ」

クリスを背負ったまま、圭は女性教師の救出に向かう。

リーダーらしき鼻ピアスは女性教師を拘束中。

もう一人のスキンヘッドは倒れた男を心配そうに揺すっている。

女性教師は催涙スプレーを噴射、鼻ピアスから逃れるが、数メートルも進まない内に足を縛れさせた。

転倒寸前の女性教師を受け止めたのは鼻ピアスでも、スキンヘッドでもなく、エプロンドレス姿のメイド……セシルさんだった。

「た、たしゆけて、くだしい」

セシルさんは女性教師を庇うように立つ。

女性教師がセシルさんを盾にしたと言った方が適切だろうか。

鼻ピアスとスキンヘッドの口元が醜く歪む。

多分、新しい獲物を見つけたくらい感覚なのだろう。

鼻ピアスとスキンヘッドがセシルさんに襲い掛かる。

ゆらりとセシルさんが揺れながら鼻ピアスとスキンヘッドの間を擦り抜けた瞬間、二人の体は宙を舞っていた。

セシルさんが二人を投げ飛ばしたのだ。

地面に叩きつけられ、二人の顔が怒りで赤く染まる。

ヒィイツ、と女性教師が情けない悲鳴を上げてセシルさんに抱き

つくと鼻ピアスがナイフを片手に突っ込むのが同時。  
避けられない！

少なくとも女性教師は刺される！

だが、ナイフは女性教師に届かなかった。

茂みから飛び出したシロが鼻ピアスの腕に噛みついたのだ。

中型犬なら抵抗もできたんだろうが、残念ながらシロは超大型犬だ。

鼻ピアスは為す術もなく押し倒され、腕を振り回される。

そのたびに血が飛び散った。

スキンヘッドはナイフを片手にシロに襲い掛かろうとしたが、セシルさんに拳銃を向けられて動きを止めた。

「こ、この犬を、追っ払ってくれよ！」

「シロ、離れなさい」

セシルさんの言葉に従い、シロは鼻ピアスから離れた。

鼻ピアスの腕は骨が露出するような酷い有様だ。

「ひ、ひでえよ、俺が何をしたんだよ」

「こちらの女性を強姦しようとしているように見えましたか？」

「だからって！」

「……だから？」

セシルさんは凶悪な笑みを浮かべ、鼻ピアスの腕を思いつきり踏みつけた。

獣じみた悲鳴が鼻ピアスの喉から迸る。

「や、やめてくれ！」

「動くなと申しましたが？」

轟音が響き、スキンヘッドは太股を押さえて地面を転がった。

「う、撃ちやがった！ この、クソアマ！」

「せ、セシルさん、その辺で」

「ケイ、近づくな！」

クリスの警告よりも早くセシルさんは動いていた。

驚く間もなく、発砲。

並の人間であれば撃ち殺されていたに違いない。

だが、クリスのお陰で鍛えられた反射神経が圭を救った。

マズルフラツシユに目を焼かれながら、圭は銃弾を躲していた。

「突然、近寄られては」

「だ、だから、近づくなと」

「もつと、早く言えよ！」

「……圭様も無事でしたので続きを。俯せになり、頭の後で両腕を組んで下されると非常に助かります」

ヒィイツ！ と悲鳴を上げ、鼻ピアスとスキンヘッドはセシルさんの指示に従った。

セシルさんは紐で手際よく二人を縛り、倒れている男も縛り上げる。

「畜生、覚えてやがれ」

毒づく鼻ピアスを見つめ、セシルさんは薄く笑った。

この期に及んで鼻ピアスはセシルさんの危うさを欠片も理解していないのだ。

「……クリス、圭様、名前は存じませんが、茂みに隠れていらつしやる御学友の方も、屋敷でこちらの女性を手当して頂けると助かります」

「ケイ、言う通りにするんじゃ」

「おう、何をするかなんて俺は絶対に聞かない、聞くもんか」

「賢明じゃ」

「ケイ兄ちゃん！」

圭は門を越えるなり飛びついてきたカルを抱き留め、その場で一回転。

「あのねあのね、ケイ兄ちゃん！……お客さん？」

美咲と女性教師を見るなり、カルは不安そうに圭の影に隠れた。

「クラス委員長の美咲と副担任の……名前は何じゃったかの？」

「あ、あの先生は三ヶ月以上も副担任を……石動君は先生の名前を知ってますよね？」

「縋るような目で見られ、圭は慌てて顔を背けた。」

「委員長さんは先生の名前を知ってますよね？」

「え、その、ごめんなさい」

「……琉架、西郷琉架です」

女性教師……西郷先生は寂しそうに呟いた。

「ケガしてるの？」

「そうじゃ、母上が手当をしると知っておった」

「すぐに用意するから上がって」

圭から離れ、カルは屋敷に戻る。

「はううう、新しいストッキングが破れちゃいました」

土間に座り、西郷先生は肩を落とした。

「擦り傷、痣、挫いた足首が腫れているのだが、ストッキングの方が心配らしい。」

「ドタドタとカルが緑色のポーチとミネラルウォーターのボトルを持って西郷先生の隣に座る。」

「傷を洗うから脱いで」

「脱ぐんですか？」

「傷口に繊維が入ったら化膿しちゃうよ」

「はううう、と西郷先生はスカートをたくし上げ、ゆっくりとストッキングを下ろす。」

「恥ずかしそうにストッキングを下ろす姿は優花のオッパイよりも価値があるような気がした。」

「カルはミネラルウォーターで傷を洗浄し、半透明のシートを貼り付ける。」

「あのお、消毒はしなくても良いんですか？」

「傷も深くないし、清潔な水で洗ったから大丈夫だよ。足首の方は捻挫だから氷で冷やして、それでも、痛みと腫れが引かないような



ら病院に行つてね」

「手際が良いわね」

美咲が声を掛けるとカルは怯えたように圭の背に隠れた。

「……お母さんに教えてもらったの」

「良いお母さんね」

「そのお母さんはチンピラ二人を血祭りに上げていたんじゃないか？  
は？ と美咲はクリスを見た。

「さっきのメイドさん？ この子、中学生よね？ あれ、年齢と髪  
の色とか……え？」

「メイドはワシとカルの血の繋がらない母親で、カルはワシの血の  
繋がらない妹じゃ」

「お前とセシルさんって、血が繋がってないの？」

「母上の戸籍年齢は二十六じゃ。そこからワシの年齢を差し引いた  
ら、どうなる？」

「シャノンさんは超ロリコン」

「違うわ、たわけ！ 普通に考えたら後妻だと分かるじゃろ！」

「愛があれば年齢も、性別も、国境も関係ないですよ」

「貴様は黙っておれ、女教師！」

「西郷先生、愛で無視できるのは年齢と国境だけだぜ」

「下限を設定せんか、ケイ！」

「でも、ボクくらいの年齢で結婚するのって普通だよ」

「部族の常識で物事を考えるのは止めるんじゃない、カル！」

はあ、はあ、とクリスは荒い呼吸を繰り返した。

「悪いことを聞いちゃった？」

「うむ、これがワシらにとって普通なんじゃが」

「……クリス、彼女は貴方を気遣っているのです」

振り向くとセシルさんがいつもの無表情で佇んでいた。

ただし、拳からボタボタと血が滴り落ち、エプロンドレスも血で  
汚れていた。

「セシルさん、あの三人は無事ですか？」

「……日本には『後悔先に立たず』と言う諺がありますが、その意味を三人とも噛み締めているのではないかと。もう少し早く反省していれば、あんな残念な結末を迎えずに済んだのでしょうか」

無事じゃなかった。

殺されていないようだが、この場合は死んだ方がマシな目に合わされたと考えるべきだろう。

「……夜も更けて参りましたが、一緒にお食事は如何でしょうか？」

とあるツテで新鮮な羊肉が手に入りました」

「わ、私は、ちよつと」

「先生も遠慮したいかな」

顔面蒼白の美咲と西郷先生は首を横に振った。

二人が何を考えているかは想像に難くない。

「じゃ、俺は二人を見送りがてら学校まで自転車を取りに戻るな」

「石動君が学校まで付いてきてくれるなら先生が美咲さんを車で自宅に送りますよ」

「クリス、資料の分析をよろしくな」

「頭脳労働はワシの仕事か？」

天才なんだろう、と圭はクリスの肩を叩いた。

荷物を取りに行ってくるので待っていて下さうい、と西郷先生はしつかりとした足取りで職員室に向かった。

気まずい、と圭は西郷先生の自動車に寄り掛かりながら美咲を見つめた。

「石動、もう気付いてるんでしょ？」

「隠し事をしていることか？」

「やっぱり、気付いてたんだ」

美咲は小さく呟き、自動車に寄り掛かった。

「あの日……アンタに助けってもらった日なんだけど、叫び声を聞い

たの。ほら、空手をやってるから痴漢くらいなら追っ払えるかなって

「それで大男に遭遇か」

「うん。あいつの足下に誰かが倒れてて……次の日に学校に来たら美咲がいなくて、職員室で美咲が帰ってないって」

グシャグシャと美咲は髪を掻き毟った。

どうしよう、と親指の爪を噛む姿は痛々しい。

「そうならないように行動してるんだろ。クリスマスも言ってたけど、少しはポジティブに考えろ」

「そんなの無理だよ。習ってた空手も役に立たなくて、あの時に切り出せば、こんなことにならなかつたかも知れないのに」

「……馬鹿か、お前は」

パンツ！ と駐車場に乾いた音が響く。

美咲が圭の頬を殴った音だ。

「……ごめん」

「何か、できたんじゃないか……そんな風に思っちまうんだよな」

「石動？」

「俺のせいでもないんだけど、それでも、考えちまうんだよな。気をつけるように言っておけば、二人とも生きて帰って来られたんじゃないかとかさ。けど、どうにもならねーんだよな。だから、今からどうするかだけ考えようぜ」

「そんなの……無理だよ」

「分かった」

圭は美咲の前に立った。

「まあ、そうだな。優花を助けたら胸を揉ませろ」

「は？」

「優花を助けられなかったら、お前を死ぬまで苛めてやる」

「何言ってるのよ、あんたは！」

「何も考えられないって言ってやがるから俺が考えてやったんだよ。優花を助けられなくて罪悪感に耐えられないってんなら、人格をぶ

ち壊してやるから安心しろ」

「最低、マジあり得ない」

「今から契約しておくか？」

「……っ！」

一瞬、ハレーションを起こしたみたい視界が真っ白になった。

美咲が圭を殴ったのだ。

うううう！ と美咲は犬みたいな唸り声を上げて、圭の頬を殴った。

痛いなんてもんじゃない。

空手で鍛えた美咲の拳は石みたいに固いのだ。

「どうして怒ってんだよ？ お前は優花を助けるつもりがないんだろ？ 少なくとも助けられるなんて思っていないんだろっ！」

「っさい、馬鹿！ 死ねっ！」

鳩尾に肘が食い込み、くの字に体が折れるのを見計らったように膝が顎を捉えた。

堪えきれずに尻餅を突いた所に美咲の爪先が突き刺さる。

「助けるに、助けたいに決まってるでしょ！」

「だったら、そう言えよ！ クリスまで巻き込みやがったくせに、真っ先に諦めてんじゃねーよ！」

「っさいのよ、エロ魔人！ 誰が、誰がアンタなんか！ 優花を助けて、助けて……二人で一緒にアンタの尻を蹴飛ばしてやる！」

低い姿勢からのフックが圭の頬を殴打する。

はあ、はあ、と美咲は荒く呼吸を繰り返していた。

「……やればできるじゃん」

圭は血の混じった唾を吐いた。

「お待たせしましたあ！」

西郷先生の底抜けに明るい声。

「じゃ、明日からもよろしくな」

「アンタ……わざと」

「バーカ、わざとでこんなに殴られるかよ」

立ち上がり、圭は頬を撫でた。  
「……馬鹿、死んじゃえ」

## 第四章 『二人目の独覚』

三日目……その日は朝から生憎の曇り空だ。

太陽が出ていないから涼しいかと言えばそうでもない。

湿度が高く、気温も晴れている時よりマシかな？ 程度だ。

いつものように自転車を押しながら坂を上り、圭は烏が多いことに気付いた。

嫌な予感に突き動かされるように圭は藤山公園に足を踏み入れた。昨晚、チンピラが西郷先生を拉致しようとした場所に烏が群れていた。

濃密な血と臓物の臭い。

烏が飛び立ち、悪夢じみた光景が露わになる。

死体が転がっていた。烏に食い散らかされた死体は人間の形をしていなかった。

三人とも何かに押し潰されたような壊れ方、人間だったと判別できる要素はボロボロの服だけだ。

すり潰された血肉の上で蠢いているのは蛆。

蛆を生む蠅がいるとか、そんな知識が脳裏を掠める。

気が付けば圭はその場で嘔吐していた。

喉が痛い、口の中に酸っぱい味が広がる。

歯の裏がザリザリして、胃が裏返りそうなくらい蠕動している。

誰だ？

誰が、殺した？

決まってる。

あんな残念な結末を迎えずに済んだ、と言っていたセシルさんが怪しいじゃないか。

ああ、クソ！ 考えが纏まらない。

訳の分からない焦燥感に追いやられるように圭は走っていた。

オリンピック選手も青ざめるようなスピードで公園を駆け抜け、車に轢かれそうになるのも構わずに道を横切る。

倒れ込むようにローランド邸の門を越え、圭は掃除を終えて家に戻ろうとしているセシルさんを睨んだ。

「……何か？」

「セシルさん、貴方は言いましたよね？ あの三人を殺してないって、なのに……どうして、どうして？」

「何を仰っているのか理解しかねますが、御自身の不甲斐なさを私にぶつけるのは筋違いです。一言で申しますと不愉快です」

ブツンと何かが切れた。

一瞬で十メートル近い距離を踏破する。

海兵隊に五年いた？

知るか！

顎を狙い、拳を振り上げる。

「ガッ！」

だが、苦悶したのは圭の方だった。

セシルさんが圭の拳に肘を振り下ろしたのだ。

中指の骨を折られた痛みを噛み殺しながら圭は無事な腕を振った。大きく弧を描くフックだ。

だが、拳がセシルさんを捉えるよりも早く、衝撃が胸元で炸裂した。

全身がバラバラになりそうな強烈な横蹴りだ。

血を吐きながら、圭は普段と変わらない無表情を保つセシルさんを睨んだ。

「な、なな、何をしておるんじゃ！」

一瞬で眠気が覚めたのだろう、庭に出て来たクリスが声を裏返らせて叫んだ。

「昨夜の三人が死んでたんだよ！」

「母上を疑っているのか？」

「シロ、ハイイロ」  
玄関に座っていた二匹がセシルさんの命令で動く。  
ハイイロが割って入ろうとしたクリスに体当たり。  
シロが倒れ込んだクリスを背で受け止める。  
二匹とも番犬で終わらせるには惜しい連携だ。

雑鬼召還、『礫』！

視界が赤く染まる。

だが、気を捉えるはずの目は何も映さなかった。  
聖域のようにローランド邸が清められていたのだ。  
何故？ と疑問が過ぎる。

仕方がなく、自分の気を消費して符に受肉させる。

ガチガチ！ と牙を打ち鳴らす式神をセシルさんは舞うように躲し、流れるように銃弾を叩き込んだ。

だが、銃弾が穿った穴は瞬時に埋まり、式神はセシルさんの柔肌を食い破ろうと襲い掛かる。

圭は舞うように式神を躲すセシルさんに忍び寄り、渾身の一撃を放つ。

「殺った！」

「……未熟」

拳が空を切った次の瞬間、細い指が圭の両肩を掴んでいた。

マズイ、と行動を起こす間もなくセシルさんの両膝が圭の後頭部に突き刺さった。

意識が一瞬だけ断絶。

鼻血を垂れ流しながら圭はセシルさんを振り払い、大きく跳躍して距離を取った。

圭は式神を呼び戻し、衛星のように周囲を巡回させる。

セシルさんは式神を倒せない。

メインに術を据えて、戦術を組み立てるのが上策。



「降参して頂けると嬉しいのですが？」

圭は答えない。

ようやく攻略ポイントが見えてきたばかりだ。

無言で圭は式神をセシルさんに放つ。

セシルさんは昨夜のように襲い掛かる式神の間を擦り抜ける。

圭は驚きのあまり目を見開いた。

式神が元の和紙に戻ったのだ。

セシルさんは二本の短剣を握っていた。

「ご存知かも知れませんが、私は五年ほど海兵隊に籍を置いておりました。ある小国でカルを養子にしたのですが、この短剣はカルの母親になった証として部族の長から譲り受けたモノです。曰く、邪を払い、見えざる怪異を断つ霊剣です」

だが、効果があるかも分からない武器を実戦で使えるだろうか。

セシルさんは圭の疑問を察したように微笑んだ。

「傷を癒すのに二年、海兵隊で五年、日本で二年……どのように残る一年を過ごしていたのか？ 私は慣れているのですよ、貴方のような術士と戦うことに。シロ！」

「何っ！」

反射的に圭はクリスの方を見やり、自身の失策を悟った。

シロは動いていない。

気付いた時は手遅れだった。

胸に衝撃を受け、圭は意識を失った。

目を覚ますと、クリスが不機嫌そうに顔を顰めていた。

場所はローランド邸の客間、そこに敷かれた布団で圭は寝ていた。

「……ケイ、貴様は人間として問題がありすぎるのではないか？」

「は？」

「死体を見て錯乱した挙げ句、母上に殴り掛かるとは何事じゃ！」

鈍痛がこめかみに走る。

「その後、母上が藤山公園に行ってきたんじゃが……死体の分量は二人半、押し潰されたような損傷具合だったと言うことじゃ。母上でも何の道具も使わずに人間を押し潰せるはずなかるう」

「そう……だよな、反省してる」

「ケイは実戦経験がない点を差し引いても錯乱しすぎじゃ」

「今、何時だ？」

「四時過ぎじゃ。ちなみにワシはケイの看病をすと言って学校はサボって、改めて資料に目を通していた所じゃ」

「何か分かったか？」

「今年の一月から大川市では四十人近い人間が失踪しておる。全国の失踪者数を年間十万人と仮定して埼玉県だと一つの自治体で三十人くらいになるはずじゃから、少し上回っていると言った所じゃな」  
「クリスは資料に目を通し、

「腕力がなさそうな爺婆と小学生が狙われてもおかしくないと思うんじゃが、会社員や中高生の方が多い。例外と言えば、一人だけ入院患者が失踪しているくらいかの？」

体を起こし、圭は折られたはずの指を見つめた。

折られたはずなのに指は無事だ。

「母上に謝っておくんじゃぞ」

「セシルさんが手当してくれたのか」

「ワシは応急処置の仕方なんぞ教わってないからの」

はああ、と圭は息を吐いた。

「真っ正面から戦えば勝てると思ったんだけど、セシルさんのあれは反則だろ」

「力の差が明確だったからこそ、その程度の傷で済んだんじゃ」

「俺は両親が死ぬまで割と真面目に修行してたんだぜ」

「母上曰く総合評価は五段階の二じゃと。体術は新兵よりマシ、魔術は中の下、短絡的な思考のせいで身体能力の高さを活かせておらんとも言っておったぞ」

「凄いダメ出し、自信を喪失しそうだ」

「すぐに錯乱するような人間が自信満々ではまずかろう。長谷川裕一の漫画でも読んで堪え忍ぶ戦い方を勉強せい」

ガウガウ！ とシロとハイイロの鳴き声。

「ご、ごめんください！」

「委員長が来たようじゃな」

チャイムいらずだな、と圭は枕元に置かれた漫画をパラパラと捲る。

しばらくして、クリスが美咲を伴って部屋に戻ってきた。

「石動、アンタって本当は弱いのか？」

「いきなりそれがよ」

「主婦にボコボコにされるなんてマジあり得ない」

「セシルさんを主婦に区分するお前があり得ない」

蔑むような視線を向ける美咲に圭は反論した。

「何か分かったのか？」

「何も分からんと言うことが分かった」

うーん、と三人で車座になって唸る。

「三人で顔を突き合わせても文殊の知恵には及ばないの」

「だったら、文殊に縋ろうぜ」

「そうするしかないようじゃな」

はふう、とクリスは憂鬱そうに溜息を吐いた。

「文殊って誰よ？」

「母上に決まっているではないか。ケイをフルボッコにした時、母上は術士と戦うことに慣れていると言ってたからの」

移動と言ってもセシルさんの部屋はすぐ目の前だ。

「母上、少し相談したいことがあるんじゃないか？」

「……どうぞ」

待つこと十数秒、いつもと変わらないセシルさんの声が聞こえた。

しよっぱい大学生のようなクリスの部屋と違い、セシルさんの部屋は殺風景なほど整理整頓されていた。

腰と同じ高さの和筆筒、大昔の映画に出て来そうな文机、タイトルが英語で書かれた料理の本やノートが並ぶ本棚……メイドと言うよりも書生の部屋と言った雰囲気だ。

「……圭様、御加減は？」

「あゝ、手加減してくれたお陰で傷一つないです」  
「ちよつと気まずい。」

「例えば、母上が正体不明の殺人鬼を追っているとしてじゃな。どうすれば、殺人鬼を捕まえられると思う？」

「犯人の手がかりは？」

「うむ、地元の警察から仕入れた犯人に襲われたかも知れない人のリストだけじゃ」

セシルさんは考え込むように唇に指を宛がった。

クリスが腰を下ろしたので圭と美咲もそれに倣う。

「経験上、突発的な事故を除けば人が人を殺す理由は怨恨、趣味、仕事に絞られます」

「秩序型と無秩序型ではなく？」

「それは犯罪の傾向であつて理由ではありません。憎しみで殺すか、楽しんで殺すか、あるいは対価を得るために殺すか。もつとも、どのタイプでもある程度ならば犯人に迫れますが」

「どうすれば良いんじゃ？」

「犯人の動機が不明でも、行動そのものには理由があります。犯行が特定の地域で繰り返されているのであれば車やバイクを所持していない。女性や子どもがターゲットとされるのであれば犯人が肉体的に脆弱であるなど……」

「うむ、分かった！ ケイ、委員長！ 次はワシの部屋じゃ！」

自分の部屋に戻るなりクリスは大川市の地図をプリントアウト、失踪者のリストと見比べながら赤いマジックで点を書き込む。

クリスは点を地図に書き終え、自信満々で圭と美咲にそれを見せた。

「……藤山公園の近くに点が密集してるな」

「そうじゃ！　ここで行方不明になった失踪者の多くはサラリーマンか、学生……秩序だった行動を取る人間ばかりじゃ！」

「けど、何処に攫われたの？」

「何故、昨夜のチンピラ三人は殺されたと思う？　それはあの三人が殺人鬼に不都合な行動を取ったからじゃ！　藤山公園に手掛かりがあると考えて間違いない！」

ドクンと心臓が大きく鼓動した。

ようやく事件解決の糸口が見えてきた。

今までやってきたことは無駄じゃなかったのだ。

「善は急げじゃ！」

勢いよく飛び出したクリスはハイイロに躓き、シロにダイブした。

「な、何をするんじゃ！」

ハイイロがクリスを前足で抑えつける。

くろう、とハイイロは困っているかのように小さく唸った。

「ワシはユーカを助けねばならないと言うのに！」

「おいおい」

圭が近づくとハイイロは牙を剥いて威嚇した。

迂闊に手を伸ばしたら噛みつかれそうだ。

「ケイ兄ちゃん！」

ドカツ！　と背後から衝撃。

カルは圭の脇から顔を出し、クリスと二匹の犬を不思議そうに見つめた。

「三人とも何をしてるの？」

「ワシが出掛けようとしたらシロとハイイロが襲い掛かってきたんじゃー！」

「シロも、ハイイロもお姉ちゃんを心配してるんだよ。だよね？」

がう！　と二匹は同意するかのようについた。

「こんなに人間と犬って意思の疎通ができたかしら？」

「少なくとも、シロとハイイロはできるみたいだな」

「ワシは！ ユーカを！ 助けねばならんだ！」

クリスが手足をばたつかせてもハイイロは巧みに体重を移動させて逃がさない。

「シロ、ハイイロ……お姉ちゃんの好きにさせて」

ハイイロはカルの言葉に従い、クリスから離れた。

「うぐう、子犬の頃から面倒を見ているワシよりもカルの命令を」

「シロとハイイロはお姉ちゃんが好きで好きで仕方がないんだよ」

「何故、そんなことが分かる」

「考えていることくらい分かるよ、家族だもん」

不満そうに唇を尖らせるクリスにカルは当然のように言った。

「なら、ワシが手伝ってくれと言ったら手伝ってくれるのか？」

「……それは」

「がう！ とシロが言い淀んだカルの代わりに吠える。

「シロ……手伝ってくれるか？」

「がうがう！ とシロがクリスに答える。

「ならばワシの命令は絶対遵守じゃ！ ワシが火の中に飛び込みと言ったら火の中に飛び込み、盾になれと言ったら盾になるんじゃないぞ！」

シロは考え込むように黙った。

「シロもやる気満々じゃ！」

シロが抗議するように首を横に振ってもクリスは何処吹く風だ。  
きゅくん、とシロは諦めたように頭を垂れた。

「シロ、探せ！」

クリスは藤山公園に入るなりシロに無茶ぶり。

シロは諦めたように息を吐き、鼻を鳴らしながら藤山公園の斜面

を上がっていく。

「犬頼みつてのが泣けてくるわ」

「こつ見えてもシロは優秀なんじゃぞ。最高スピードは時速八十キロ、起伏に富んだ山道をモノともせず、一晩中でも走り続けられる燃費の良さは他の追隨を許さぬほど」

「時速八十キロって、もう犬じゃないわね」

ふがふが、とシロは斜面を下っていく。

県道は目と鼻の先だ。

優花の家がある新興住宅地も近いし、藤山公園を拠点になっているのは考えて間違いなさそうだ。

だが、順調だったのはそこまでだった。

「どうしたんじゃ、シロ？」

グルグルとシロは困惑したように回った。

いや、回ると言うより円を描くように歩いている。

がうがう！ と何かを伝えようと吠える。

「分からん！ 日本語、もしくは英語で話せ！」

「何処まで無茶ぶりするんだよ、お前は」

「ボディーランゲージでギャアアアアアアア！」

突然、クリスが絶叫した。

地面から伸びた血塗れの手に足首を掴まれたのだ。

ほぼ同時に圭とシロは跳び退る。

いや、わずかながらシロの方が早い。

こいつも単なる犬じゃなさそうだ、とそんなことを考えていると地面の隙間から鼻ピアスが顔を出した。

顔が腫れ上がっているものの、不可逆的なダメージはないようだ。

「あ……た、助けてくれ」

「ヒイイッ！」

クリスは鼻ピアスを踏みつけ、足首から手を引き剥がした。

ガチガチと震えながら、圭の背に隠れる。

まるで幽霊に遭遇したみたいな怯えぶり。

「ちょ、いきなり踏みつけるなんてあんまりじゃない」

「近づくな、委員長！」

「これなら痴漢もできないでしょ」

大丈夫ですか、動けますか？ と美咲は鼻ピアスの腕を掴んだ。

「俺も止めた方が良いと思うんだが？」

「アンタまで何を言ってるのよ。一、二、三で引つ張り出しますから……一、二、三！」

灯油タンクを持ち上げたら空になっていたみたいな感じで美咲は尻餅を突き、

「……っ！」

ズザザザッ！ と鼻ピアスの手を振り解いて後退した。

「お、お陰で助かった。暗くて、蠅がブンブン飛び回ってよ。畜生、芋虫がついてやがる」

鼻ピアスは忌々しそうに芋虫を払い除ける。

白い虫だ。

払い除けても、払い除けても、次から次へと湧いて出る。

「なあ、聞いて良いか？」

「何だよ！ 畜生、こんな所にも」

「止めい、ケイ」

圭は大きく深呼吸、

「どうして、下半身がないのに生きてるんだ？」

「……何を言ってる」

鼻ピアスは何もない空間を見つめ、動きを止めた。

そこにあるはずの下半身は存在しない。

断面はグシャグシャに潰れ、無数の蛆が蠢いていた。

「と、トリックだろ？ そうじゃなければ……」

「下半身が切断されても生きていられるって話は聞いたことがあるけど、それは適切な処置をされてるからだろ」

「そ、そんな、俺は生きてる！ 生きて、生きて、畜生……虫が、虫が」



鼻ピアスは狂気に取り憑かれたように蛆を払う。

だが、蛆は後から後から湧いて出てくる。

この暑さだ。防腐処置されていない体が虫の巣と化していても不思議じゃない。

「へへ、虫を払えば元通りだ、潰したんだ、潰したんだから、元に戻るだろ！ おい、お前！ 元通りだろ！ 俺は……！」

鼻ピアスが地面を這って美咲に近づいていく。  
ズルリとシロに噛み砕かれた腕が抜け落ちる。

「近づかないで！」

「ヒヤヒヤヒヤッ！ 俺は元に戻ったんだ！ 昨夜は失敗しちまったけど、今度は上手くやる！」

「悪いけど、次はねーよ」

溜息を吐き、圭は鼻ピアスを踏みつけた。

残っていた内臓やら、虫やらが断面から溢れ出した。

悪臭が生温かな空気となって押し寄せる。

最悪、吐き気を通り越して頭痛がする。

「少しくらい反省しろよ。あんなことをしていたから死んじまったんだろっが」

「お前に俺の何が分かるんだよ！ ろくな経験も積んでないガキがしたり顔で説教してるんじゃないぞ、ゴラアアッ！」

「普通の高校生よりも人生経験を積んでるつもりだけだな」

鼻ピアスから離れ、圭は懐から符を取り出した。

雑鬼召還、『散』！

パン！ と乾いた音が響いた。

「痛っ！ 何よ、今の」

「うぐっ！」

顔を顰め、美咲とクリスが圭を見つめた。

今のは気を散らす術だ。

生きた人間に対する効果は小さな痛みを与える程度だが、

「な、何だよ、いきなり暗くなったぞ……さ、寒い」

死者は気を補填できずに二度目の死を迎える。

「今から、お前は死ぬ」

「何を、畜生……寒い、寒い、ここは寒い」

鼻ピアスの動きが鈍り、

「畜生、畜生、畜生っ！ 死にたくなんてなかった！ 何もできなくても、クソみたいな人生でも……生きて！」

最後の力を振り絞るように絶叫した後、それっきり動かなくなつた。

圭は大きく息を吐き、手が小刻みに震えていることに気付いた。

最後で人間だと認めちまつたんだ。

鼻ピアスは同情できる相手じゃなかった。

それでも、あいつは人間だったのだ。

「ケイ、ユーカを助けたら幾らでもワシの胸を貸してやる」

「優花に頼むからいらね」

鼻ピアスが出て来た隙間を蹴飛ばすと地面がスライドした。

そこに隠されていたのは緩やかなスロープ……地面と壁がコンクリートで補強された人工物だ。

「何だよ、これ？」

「よく分からないけど、防空壕じゃない？」

「こんな田舎にこんな防空壕なんて造るなんて意味ないだろ」

「お爺ちゃんが軍需工場があつたとか言ってたから、その流れで造つたんでしょ」

「行くぞ、シロ」

クリスはシロを先導させ、防空壕に入り……十秒くらいしてから走って戻ってきた。

「いかん、暗すぎて何も見えん」

「照明もないしな」

圭は懐から符を取り出し、

雑鬼召還、『灯』！

自分の気を消費して明かりを生み出す。

「この明かりは何時間くらい持つんじゃない？」

「一時間くらいだな」

「よし、今度こそ出発じゃ！」

当然のことながら防空壕の中は暗かった。

ふごふご、と鼻を鳴らして進むシロの足取りに迷いはない。

「何故、あの男は生きていたんじゃない？」

「死んでなかったただけだろ。力任せに死を先延ばしにしてただけで放って置けば動かなくなってたたろうさ」

「ワシはケイの言う死が今一つ理解できん。先延ばしにしたとしても、死んでいないのならそれは生きているのではないか？」

「少なくとも自家発電から電池式に切り替わった時点で終わってるだろ」

「そんなもんかのう？」

「納得できないなら石動家の古文書を読むか？ 一人の人間を生き返らせるために何百人も犠牲にしたり、廃人になった例がゴロゴロしてるぞ」

「……分かれ道じゃな」

足を止め、右の道に進む。

理由は単純、シロが選んだからだ。

「変な臭いがしない？」

「うむ、生ゴミが腐ったような臭いがするのう」

シロに案内されて辿り着いたそこは、

「ちよ……っ！」

「……っ！」

口を抑え、クリスと美咲が逆走する。

「いっ、ごめん……吐く」

「ワシもじゃ」

美咲とクリスは分岐点で吐瀉物を撒き散らした。

何の気構えもなく死体の山を見たのだから当然の反応だ。

シロに案内された先はゴミ捨て場だった。

気が狂いそうな蠅の羽音と頭痛を催す悪臭で満たされたそこには腐乱死体が積み重ねられていた。

まともな死体は一つもなかった。

腐敗して膨れ上がったたり、体の一部を切り取られたりした死体のオンパレードだ。

もう少しクリスと美咲が注意深ければ、爪が剥がれた死体にも気付けただろう。

被害者の何人かは廃棄された後も生きていて、ここから逃げ出すとしていたのだ。

ゴミ捨て場に残留する気がそれを裏付けていたが、圭は黙っていた。

被害者が生きながら虫の餌になったと知っても悪夢が長続きするだけだ。

ようやく吐き気を堪えられるようになった二人と今度は左の道を進む。

「……ケイ、学校の図書館にある『異次元騎士カズマ』を読んだことがあるか？」

「このタイミングで何だよ」

「第二部『海賊旗トラベル』でツンデレヒロインが敵の海賊に攫われるんじゃが……」

「無事に助かったんだよな？」

「顔の形が変わるような酷い拷問と凌辱を受け、主人公と再会した直後に死んだ」

「このタイミングで絶望的な話だな、おい！」

「ちよつと、止めてよー！」

「じゃが、もし、もしじゃぞ？ ユーカがそんな目に遭っていたら

ワシは……」

「……待て」

圭は新しい符に明かりを灯し、先行させた。

符が白々と半球状のホールとその中心に横たわる少女を照らし出す。

こちらに背中を向けるように倒れていて、優花なのか確認できない。

少女が寝返りを打ち、目を見開く。

「クリス、美咲ちゃん」

「優花/ユーカ！」

「来ないで！」

堪らず走り出した二人を優花が制した。

「お願い、来ないで」

「優花……あの時、助けられなかったのは謝る。もし、あんたが許してくれないのなら許してくれなくても良いから」

「もし、障害が残るような傷を負わされても大丈夫じゃ。良い医者を紹介するし、ちゃんと治療費も面倒を見る。それ以上のことがあってもケイが何とかしてくれるはずじゃ！」

「お願い、来ないで」

再び歩み寄ろうとした二人を優花は泣きそうな声で拒んだ。

「二人とも良いか？」

「何じゃい！」

「優花つて攫われて三日目だよな？」

「それが？」

「だから、小便を漏らしてるから近づいて欲しくないんじゃないかね？」  
「ううううう、と優花の嗚咽が陰鬱に響いた。」

「大丈夫じゃ、ユーカ！ ワシもケイに色々されて小便を漏らした！」

「ええ、大丈夫だから！ 平気よ、平気！」

二人は安堵の息を吐き、優花に突進した。

優花は泣き喚いたが、最悪の展開を回避できたことに喜ぶ二人は止まらなかった。

シロが紐を噛み千切り、美咲が優花に肩を貸して立ち上がらせる。「優花、あの大男に何かされたか？」

「……触られた瞬間に気を失って、時々、目を覚ましたんだけど、凄く体が怠くて、触られて気を失って」

「どうやら、あの独覚は気を奪うタイプらしい。」

「ケイ！」

クリスの叫び声に圭の体は自然と動いていた。

思い切り地面を蹴った直後、背中に灼熱感が走る。

大男が鉞で斬りつけてきたのだ。

空中で体を捻り、

雑鬼召還、『礫』！

気を消費して式神を放つ。

式神は大男の腕を食い千切り、牽制するように周囲を旋回する。

「こつ言う台詞は好きじゃないんだが……ここは俺が引き受けた！」

「倒してしまっても構わんのだろ』ではないのか！」

「悪い、相性的に勝てそうにない」

大男が式神を掴む。

瞬間、式神は元の符に戻った。

大男が符に込められた気を吸収したのだ。

一昨日よりも強くなっている。

「こつちのレベルは据え置きなのに、敵のレベルが上がるってのはクソゲー並だな」

雑鬼召還、『爆』！

符が漆黒の炎と衝撃波を撒き散らしながら炸裂した。

圭はバランスを崩した大男に突貫、壁に縫いつける。  
「行け！」

ホールを照らしていた明かりを出口に向かって飛ばす。  
まず、クリスが、美咲と優花が後に続く。  
追撃を想定してか、シロが最後だ。

どうやら、シロは圭が足止めできると考えていないらしい。

大男が圭の首を掴む。

瞬間、視界が明滅した。

自分で急激に気が吸われているのが分かる。

ギリギリと大男の指が首に食い込む。

「離しやがれ！」

大男の胸を蹴り、圭は拘束から逃れる。

少しばかり首筋の肉を刮げ取られたが、致命傷にはほど遠い。

「なるほど、そう言うことか」

術の直撃を受け、大男が着ていたコートはボロボロになっていた。  
その下にあったのは剥き出しの筋肉だ。

あのゴミ捨て場は犠牲者の筋肉を加工し、筋肉強化服を造る工房  
を兼ねていたのだ。

スピードで攪乱してチマチマ削るしかねーか、と圭は距離を取っ  
た。

大男が柄と先端を持つように鉋を構えた。

次の瞬間、地面が炸裂した。

大男の姿が消える。

動体視力を上回るスピードで突進したのだ。

そう理解する間もなく圭は跳ね飛ばされ、ホールの壁に叩きつけ  
られた。

咳き込むように血を吐き、圭は傷を確認する。

全身が熱いが、五体満足だ。

どうやら、大男は小回りが利かないらしい。

「……だから、勝ち目があるって訳でもねーんだよな」

大男は壁から体を引き剥がし、さつきと同じように鉈を構える。理屈としてはスピードを制御できないから、刃を固定して押し斬ろうと言うものなんだろう。

大男の太股が膨れ上がり、圭は跳躍した。

残像を残して大男が真横を通り過ぎる。

大男が壁に激突、轟音と共にホールが揺れる。

雑鬼召還、『爆』！

漆黒の炎と衝撃波が大男を打ち据える。

並の人間ならば死にかなない威力を秘めているのだが、大男は何事もなかったように壁から体を引き剥がした。

術士になるべく修行した日々を否定されたようで悔しいが、総合評価二のプライドなんてクソみたいなもんだ。

大男が鉈を振り上げる。いや、まるでゴルフのスイングみたいな……マズイ！

大男の腕が膨れ上がり、鉈がコンクリートの床を打ち砕いた。

コンクリートの破片が散弾のように圭に襲い掛かる。

両腕でガードしたものの、肉が裂け、骨が碎ける。

死ねとばかりに折れた鉈が突き刺さり、大男の拳が圭の胸を直撃した。

ゴミのようにホールの入口まで吹き飛ばされ、圭は噎せ返りながら血を吐いた。

意識が途切れそう、鉄臭い味が鼻の粘膜まで侵している。

けど、逃げる時間は稼いだよな。

セシルさんに任せれば良いか、と圭は目を閉じた。

足音が近づいてくる。

不思議と恐怖はなかった。

このまま諦めて良いのかな？ と疑問が浮かぶ。

ベストを尽くせたか？ やり残したこと、心残りはないか？



……クリスは気に病むんじゃないか？  
ベストを尽くしてないし、西郷先生との約束を果たしていない。  
カルのオツパイの成長具合を見届けたい。  
エロ雑誌をアパートに放置しっぱなしだ。  
それに、クリスを泣かすのは絶対にダメだ。  
「未練ばかりじゃねーか！」  
満身創痍の体を気合いで動かし、圭は符を構えた。

雑鬼召還、『爆』！

ありつただけの気を消費して符を放つ。  
出し惜しみはなしだ。

だが、大男は衝撃波をもともせずに進退する。

丸太のような腕を振り回し、それだけで圭を吹き飛ばした。

全身が痛いんだか、熱いんだか分からない。

訳も分からずに涙が出る。

生理現象か、それとも死が怖いのか。

多分、両方だ。

やはり、死は恐ろしい。

傷だらけで満身に動かない体が恐ろしい。

「……まだ、だ」

まだ、逆転の目は残っている。

蹴り上げられ、血反吐を撒き散らし、そのたびに圭は立ち上がった。

分岐点に辿り着いた生きているのが不思議なくらい傷を負っていた。

立ち上がろうとした圭の頭を掴み、大男は右側の通路に投げ捨てる。

ゼヒゼヒ、と呼吸を繰り返し、圭は歩いた。

この先はゴミ捨て場だ。

もう、大男は圭を脅威と認識していない。  
だから、圭はゴミ捨て場の入口で笑った。  
狂ったように笑った。

気が満ちている。

「……ああ」

不意に理解する。

気は万物の根源……あらゆるモノであり、何物でもない無色の力だ。

空間に残留するのは変化と流転こそが本質だからだ。

いや、それすらも理解から掛け離れている。

今なら兄貴の領域にまで踏み込めるかも知れない。

甘美な誘惑だったが、圭は踏み止まった。

今は独覚を倒すことだけを考えれば良い。

「お前を全力でぶち殺す！」

宣言し、圭は床を蹴った。

床が炸裂し、降り積もった土埃が舞い上がる。

圭は弾幕のように拳を、蹴りを放つ。

そのたびに骨が砕けるが、吸い上げた気で復元させる。

捨て身の攻撃を受け、流石の大男も徐々に後退する。

こいつは逆襲された経験がないのだ。

だから、主導権を握られると防戦一方になってしまう。

「……遅い！」

大男の腕を潜り抜け、

雑鬼召還、『爆』！

至近距離で符を炸裂させた。

生き埋め覚悟、防空壕全体を激しく揺らすほどの衝撃波だ。

壁に叩きつけられた大男は動かない。

大男は剥き出しの筋肉から血を噴き出し、断首を待つ罪人のように頭を垂れていた。

安堵の息を吐き、圭は壁にもたれ掛かるように座り込んだ。

もう少し晴れやかな気分になると思っていたが、残ったのは後味の悪さだけだ。

何かが見界の隅で動く。

殺したはずの大男が動いたのだ。

けど、どうして？

至近距離で衝撃を受けたはずなのに？

ゆるゆると大男が圭に腕を伸ばす。

「……畜生、これまでかよ」

「諦めている暇があるのなら、頭を下げて頂きたく」

次の瞬間、大男は宙を舞っていた。

セシルさんが背後から蹴り飛ばしたのだ。

間髪入れず、ショットガンが火を吹いた。

殴られたような衝撃が圭の頬を叩き、大男の胸が炸裂。

ビシャビシャと血肉が飛び散る。

セシルさんは映画のワンシーンのような光景に不満そうな表情を浮かべ、

「圭様、逃げます」

圭を肩に担ぎ、細身の体から想像もできないパワフルさで走り出した。

セシルさんはホラー映画の殺人鬼のように追い掛けてくる大男にショットガンをぶっ放し、片手だけで再装填する。

「熊狩り用のスラッグ弾を使っているのですが、あまり効果がないようです」

「派手に血肉が飛び散ってるんですけど？」

「着弾した瞬間に筋肉を爆破、分離させて威力を軽減しているでしょう。戦車に付けるリアクティブアーマーのようなものではない

かと」

セシルさんの言葉通り大男は着弾の瞬間にこそスピードが鈍るものの、徐々に距離を縮め始めていた。

「ど、どうするんですか!」

「私が保管しているのは銃器だけではございません」

外に飛び出すと同時にセシルさんは真横に跳んだ。

弁当箱? と防空壕の出入り口に置かれた箱状の物体を圭は眺める。

大男が飛び出した瞬間、弁当箱が爆発した。

轟音、土砂が大男を呑み込み、粉塵が舞い上がる。

「M18クレイモア、700個の鉄球を撒き散らす指向性対人地雷です」

粉塵が収まったそこにはボロボロになった大男が倒れていた。

「つて、何じゃこりゃ!」

周囲を見渡した圭は絶叫した。

藤山公園の斜面に累々と人が倒れていた。

警察関係者ではないようだが、

「石動家本家の方々です。救出の邪魔をされたので、再起不能になつて頂きました」

「二十人以上いるのに?」

「総合評価は三です。個々の技量は見るべき所がありますが、兵隊としての練度は新兵以下です」

「ケイ、無事だったか!」

クリスが地面に下ろされた圭に抱きついた。

「ち、血塗れではないか!」

「……優花と美咲は?」

「まずは自分を心配しろ、馬鹿者」

圭はクリスの髪を撫でながら安堵の息を吐いた。

「クリス、圭!」

何処か懐かしさを感じさせる叫び声。

セシルさんが圭とクリスを庇うように立った次の瞬間、右腕が宙を舞った。

大男の投げた石がセシルさんの腕を吹き飛ばしたのだ。肩から噴水のように血が噴き出し、セシルさんはスローモーシヨンのように倒れた。

「……セシル！」

クリスはセシルさんに走り寄ろうとした。

だが、それよりも早く大男がクリスの首を掴んだ。

大男……いや、大胸筋の隙間から病的に白い肌と黒い瞳が覗いていた。

リアクティブアーマー、とセシルさんから教わった単語が脳裏を過ぎる。

こいつは筋肉を剥離させることでクレイモアを凌いだのだ。

「てめえ、クリスを……離しやがれ」

奥歯を噛み締め、圭は震える足で立ち上がった。

けれど、消耗し尽くした圭にそれ以上のことはできなかった。

無造作な蹴りで吹き飛ばされ、木に叩きつけられる。

力なく血を吐き、それでも、圭は手を伸ばした。

「ケイ、ケイ！」

「クリス！」

ガクガクツとクリスが痙攣した。

赤い視界がクリスの生命力が大男に奪い取られる様を残酷なまでに伝える。

涙で視界が滲んだ。

どうして？ どうして、俺は……こんな時に動けない！

神様がいるのなら、いや、悪魔だって良い。

俺に力をくれ！

目の前にいる女の子を助ける力で良いのに！

「……ち、くしょう！ どうして、俺は！」

どうして、こんなに無力なんだよ。

大男は無力な圭を嘲るようにクリスの命を啜ろうとした。  
だが、大男はクリスの命を啜れなかった。  
腕がクリスごと地面に落ちたからだ。

「ケイ？」

「俺じゃない……それよりも早く逃げろ」

「こ、腰が抜けて動けんのだ」

幸い、大男は腕を切り落とされた衝撃でフリーズしている。  
今にも泣きそうな顔でクリスは這い、

「……セシル？」

ゆっくりとセシルさんが体を起こした。

闇が陽炎のようにセシルさんを包んでいた。

闇は信じられないほど高密度に圧縮された気だ。

大男が動く。

気を奪う独覚にしてみれば、セシルさんは最高の餌に違いない。

だから、大男は決定的に選択を誤った。

大男は亀のようなスピードで距離を詰め、丸太のような腕を振り下ろした。

だが、大男の拳はセシルさんに届かなかった。

セシルさんが右腕の断面から伸ばした闇で大男の攻撃を受け止めたのだ。

闇の中で血が沸騰したように泡立ち、その中で骨と肉が再生を果たす。

「……嘘だろ？」

思わず、圭は呟いた。

圭にも傷を塞ぐことなら、多分、千切れた腕を繋ぐくらいならでききる。

だが、なくなった腕を再生させるなんてできない。

備わっている機能を増大させることはできても、新たな機能を追加するなんてできないのだ。

そんな機能を追加したら、人間じゃなくなってしまう。

鬼神覚醒、『装』！

闇がセシルさんの白い肌を彩り、白い髪を黒く染め上げる。

大男が振り下ろした拳をセシルさんは迎え撃つ。

拳と拳が真正面から激突し、大気が震えた。

力負けしたのは大男だった。

腕を弾かれ、バランスを崩した大男は一步だけ後退する。

筋肉を膨張させ、大男は再び拳を振り下ろした。

今度もセシルさんは真つ向から迎え撃つ。

衝撃と共に大男の腕が弾かれる。

「……未熟」

大男の腕が千切れ飛び、セシルさんは機関銃のような連打を叩き込む。

大男は筋肉を剥離させて威力を軽減させるが、次の一撃の威力を高めるだけだ。

もう逆転のチャンスはない。

逃げようにも実力差がありすぎて逃げ出せない。

けれど、セシルさんの虚を突ければ……、

大男の筋肉が炸裂し、血煙がセシルさんの視界を遮る。

一瞬、本当に、一瞬だけ連打が止んだ。

大男は足の筋肉を膨張させ、

鬼神覚醒、『槌』！

闇が巨大な拳を形成、一気に大男を押し潰した。

筋肉が弾け、病的に痩せた少年が押し出される。

生まれた時から陽の光を浴びていないんじゃないかと思うくらい

青白い肌。

瞳は世界の全てを憎んでいるみたいに、羨んでいるみたいに暗く

澱んでいた。

セシルさんは獣のように唸る少年を凍てついた瞳で見下ろし、

「……ま、って」

無言で拳銃をぶっ放した。

頭蓋が爆ぜるが、すでに人間を辞めている少年は死ねなかった。

あー、あー、と意味不明な音を漏らす。

「話す必要はありません。どのような理屈を用いようと貴方の罪は正当化されず、幾億の言葉を費やそうとも……私は貴方を殺します」  
そう言っつて、セシルさんは笑った。

「どれくらい致命傷を与えれば、貴方は死ぬのでしょうか？ 十回、二十回、百回？ 死ぬまで攻撃を叩き込む準備は整えておりますので御安心下さい」

セシルさんは無造作に少年の首を掴み、気を吸い上げた。

ペキペキと少年の首が薄いガラスのように碎ける。

「貴方が行ってきたように、命を吸い尽くされるのがお好みですか？ 早く決めて下さらないと枯死してしまいますよ？」

クスクス、とセシルさんは忍び笑うと少年を地面に投げ捨てた。

地面に触れた瞬間、少年の体はガラス細工のように碎け散った。

それが……人知れず、殺人を繰り返した少年の最期だった。

空を仰ぎ、セシルさんは大きく息を吐いた。

「セシルさん、貴方は何者なんですか？」

「私は、バケモノです」

目を閉じ、セシルさんは躊躇うように言った。

「十年前……あの事故で瀕死の重傷を負った私は願ったのです。死にたくない、誰を犠牲にしても生き延びたいと」

片膝を突き、セシルさんは手で顔を覆った。

瞳は黒く染まり、禍々しい漆黒の気が立ち上る。

「だから、私は同じように死に掛けていた人々から、奇跡的に無事だった人々からも魂を奪いました」

はあ、とセシルさんは蕩けるような息を吐いた。



「今、私の中には二つの意思があります。一つは貴方達をバケモノになっても守りたいと言う意思、もう一つは貴方達の魂を奪いたいと言う意思です」

「……これが理由かよ」

ようやく、独覚が最悪の代名詞と呼ばれる理由に気付けた。

セシルさんが教えてくれた。

不相应な力は自分自身すら焼くのだ。

「クリス、逃げろ」

「ワシは逃げん！」

やっぱりか、と圭は頭を掻き毟りたい衝動に駆られた。

「母上は、セシルは嘔吐きじゃ。いつも嘔吐を吐いて、誰かを助けるために傷ついて、寂しそうに笑うんじゃ……ワシは覚えておるぞ」

クリスは拳を握り締めた。

「セシルが血塗れの腕でワシを抱き締めてくれたことも、この子を助けて下さいと祈っていたことも……誰も助けてくれなくて、セシルが何かをしたことも覚えて」

大粒の涙がクリスの瞳から零れる。

「セシルは……人間じゃ！ワシの、ワシの大切な母上じゃ！」  
闇が弾けた。

結果は言うまでもない。

洋の東西を問わず、奇跡を起こせるのは乙女の涙だけなのだ。

その晩、どうしても寝付けずに圭は布団から抜け出し、ローランド邸の庭園を眺めていた。

独覚の正体はすぐに分かった。失踪者リストの中で唯一の入院患者だ。

そいつは先天性の内臓疾患を抱え、何度も入退院を繰り返していた。

幾度となく生死の縁をさまよう中で独覚として覚醒したんだろう。

「……眠れないのですか？」

「ええ、どうしても納得できないと言うか、あまりにも上手く出来過ぎているような気がして」

圭はセシルさんに声を掛けられても驚かなかった。

と言うよりも、タイミング的に声を掛けてくれないと困る。

「例えば？」

「全部……普通の高校生が殺人鬼を追い詰めるなんて、どれだけ警察は無能なんだったって話で」

クリスは連続殺人について調べただけだし、美咲は嘘を吐いていた。

西郷先生は西郷先生で全く役に立っていない。

石動本家が動いていたのに事件が解決しないのも変だ。

「貴方達は私が考えていたよりも上手く動いてくれましたが？」

「やっぱり、セシルさんの手の上で踊っていただけだったんですね」  
クスクス、とセシルさんは忍び笑う。

「ええ、貴方達が予想通りに……」

セシルさんは台詞を中断し、

「及第点を取ってくれたからこそ、私は独覚を倒せたのです」

この事件を解決するために必要だったのは高校生探偵ではなく、セシルさんが石動本家を撃退するまで殺人鬼と戦うコマだったのだ。

「……それから」

「他にも何か疑問が？」

「つか、事実確認みたいなもんで」

どうして、圭をコマとして選んだのか？

セシルさんも普通の高校生に殺人鬼を追わせるほど無謀じゃないだろう。

だから、最初からセシルさんは圭が術士だと知っていたんじゃないか。

そう仮定すると、セシルさんの正体が見えてくる。

十年前、重傷を負ったセシルさんは独覚になった。そこまでは納得できる。

けれど、独覚にしては力を技術的に使いこなしすぎている。つまり、術士としての下地があったから魂を喰らえたんじゃないだろうか。

「兄貴……だろ？」

「やはり、気付かれましたか」

「どうして、そんな格好してんだよ？ その胸はパット？」

圭は無造作にセシルさん……十年前に行方不明になった石動都の胸を揉んだ。

張りがあり、たゆんたゆんして……圭は飛んだ。

セシルさんの影に撃ち出され、ロケットのように、砲弾のように飛んだ。

屋敷の塀に叩きつけられ、

「な、なんで、胸があるんだ！」

「ちよつと、スカートを掴まないで下さい！」

「顔を赤らめて言っくんじゃねーぞ！ つーか、アンタは男だろ！」

戦線に復帰した圭はセシルさんのスカートの裾を掴んだ。

「母上に何をしておる！」

「ぶべっ！」

クリスに跳び蹴りされ、圭は廊下から庭に転がり落ちた。

「前々から節操がないヤツだと思っていたが、クラスメイトの家庭を滅茶苦茶にするつもりか！」

セシルさんは頬を赤らめ、仁王立ちするクリスの後に隠れた。

「待て、クリス」

「何じゃ？」

「セシルさんは俺の兄貴だ」

「気でも違ったか！」

「違つてねーよ！ セシルさんは俺の兄貴なんだよ！」

「何が兄貴じゃ！ 大体、その、母上にはついておらんわい！」

「切ったの？」

「アホか！ 子宮も、卵巣もあるわい！」

「まさか、移植？」

「自分の臓器ですが」

「訳が分からない！」

「騒ガシイヨ、ゴ近所サンに迷惑ダヨ」

「父上、良い所に！ ケイが母上が自分の兄貴だと世迷い言を！」

「いやいや、セシルさんも兄貴だって認めまし！」

「シャノンさんはセシルさんを見つめ、

「セシルガ日本ノ戸籍的二男ダツタノ八知ツテルヨ？ キチント結婚前二話シアツタカラネ。ケレド、日本デ八死亡扱イダシ、戸籍八新シク作ツタカラ問題ナイヨ」

「何じゃと！」

「ほら、言っただじゃねーか！」

「いや、ワシはレントゲンとMRIで子宮と卵巣があるのを確認しておるぞ？」

顔を見合わせ、圭とクリスは首を捻った。

「……二人ともインターセクシャルという言葉はご存知でしょうか？」

セシルさんの説明によれば、遺伝子的な性別と外見的な性別が一致しないことがあるらしい。

セシルさんの場合、胎児期のホルモンの影響で遺伝的には女性であるにも関わらず性器が男性器化したらしい。

「えー、つまり、兄貴は……兄貴じゃなくて本当は姉貴だった？」

「そう言うことになります」

「どうして、俺が知らないの？」

「石動は古い家ですから」

なるほど、と圭の方が納得してしまった。

兄貴は婚約者がいたし、実は女でしたじゃ収まらないだろう。

「婚前交渉を繰り返した挙げ句、実は女の子でした  は通らない

かと」

「そりゃ、通らねーよ!」

突っ込みながら、圭は遺産を奪われた理由に思い当たってしまった。

そりゃ、大事な娘を傷物にされたら八つ当たりもしたくなるだろう。

「積もる話もあるだろうが、最初に言うべき台詞があるのではないか?」

「おかえり、兄貴」

「……ただいま、圭」

ちよつとした沈黙の後、はにかむようにセシルさんは笑った。

## 最終章 『帰』

終業式の朝、今日も今日とて圭はローランド邸に続く坂を上る。生活に余裕が出たお陰で自転車の重みも悪くないと思えるようになった。

金がなくて乗ってるんじゃないぜ。

兄貴がくれた自転車だから乗ってるんだぜみたいなノリだ。

黄色の通学帽が数メートル先で揺れている。

いつもより三割増ではしゃいでいるのは明日から夏休みだからだろ。

ちなみに圭の予定は白紙だ。

いつものように小学生が、

「モーン！」「」「」

「おはようございます」

相変わらず無表情なセシルさんの挨拶に苦笑い。

「おはようございます……兄、じゃなくてセシルさん」

「ええ、おはようございます」

ザッ、ザッと道路を掃くセシルさんを見ながら圭は自転車を止めた。

この人が兄貴なんて信じられないよな。

オッパイだけじゃなくヒップラインとか女性そのものだし、と心の中でセクハラ発言。

「そう言えばさ、あの事件ってどうなったんだ？」

「犯人は死んでしまいましたし、警察が辻褃を合わせるのでは？」

セシルさんは興味がなさそうに答えた。

と言うよりも本気で興味がないのだ、この人は。

「一人暮らしを続けるつもりですか？」

「血縁はあっても戸籍上は他人だからさ。世間体が悪いじゃん。俺

がいたらシャノンさんとエロいことができなそうだし……っか、子どもが二人もいて、どうしてるの？」

「こ、この、訴えますよ」

セシルさんは顔を真つ赤にして俯いてしまった。

「シャノンさんのお陰で遺産も取り戻せそうだし、大学を卒業するまで援助してくれるって言うてくれたし、それに好きな女の子と一つ屋根の下って拷問じゃん。下手に手を出したら兄貴に殺されかねないもん」

「同意の上ならば構いません。もっとも、あの子は恐がりですから余程のことがない限り気持ち打ち明けないでしょうが」

「ん？」

セシルさんは太股を指差す。

これもよく考えれば分かること……セシルさんがクリスの足を治せない訳がない訳で、

「実の母親から愛されなかったことが原因なのでしょう。クリスは他人から向けられる好意に懐疑的で、とにかく最初は他人を遠ざけようとしています」

「ああ、それで」

あの刺々しい態度も、シャノンさんが後悔している理由もそれが原因だったのだ。

「ちなみに、カルはMです」

「聞いてねーよ！」

「私を暗殺するために派遣されたのですが、ボコボコに殴った後で拷問に掛けたら、驚くほど臆病で、苛められるのが好きな娘に」

「あれはアンタが原因か！　っか、何をした！」

「水を飲ませて、こっ、逆さの状態でM字開脚を」

「聞きたくなかった！　俺のセシルさんのイメージが壊れた！」

「失礼な。こっ見えても、私はシャノン以外の男性は知りません」

「女は……っ、指で数えてる！」

「カルを含め、五人くらい」

「多いよ！」

「女性に対しては百戦錬磨の私もシャノンに対しては防戦一方になってしまふのですから不思議なものです」

「聞いてねーし」

でも、あの恥じらうような仕草が演技じゃなくて安心した。

シャノンさんの懐の深さは同じ男として学ばなきゃいけないような気がする。

「話を戻しますが、クリスは圭と一緒にいたいと考えたのでしょう。けれど、告白する勇気がないから、歩けないと嘘を吐いた」

「流石、母親」

全く、何処までこの人の手の上なのか。

「待たせたな。母上、行ってくる」

「はい、行つてらっしゃいませ」

セシルさんは恭しく頭を垂れた。

「知らない人がおいでおいでしてるう！ えつ、三途の川？ 三途の川なの？ 出掛けな〜い！ 口笛吹けな〜い！ びっくりしようよ！ わっは〜！ 調べて納得！ 声優のチヨーはチヨーさんだっただよ！ なんだってえ！」

「朝っぱらから、無駄にテンションが高いなあ」

「うむ、『たんけんぼくのまち』をラップ調で歌ってみた」

いつものように藤山公園を迂回、クリスと益体のない会話をしながら高校へ続く坂を下る。

「ケイは……セシルと一緒に暮らしたくないのか？」

「一緒に暮らしたいって気持ちはねーな。気持ちの整理がついてないってのもあるし、今更感があるのは否定できねーし、他にも理由はあるんだけど、兄貴がセシルさんとして手に入れた居場所に割り込むのはダメな気がするんだよ」



「そうか」

それ以上、クリスは何も言わなかった。

校舎裏の自転車置き場に自転車を止める。

教室に入るとクリスは優花の所へ、圭は自分の席へ。

「どうして、お前がここににいるんだよ」

「……私がここにいちやダメなの？」

「悪くねーけど」

「じゃあ、良いじゃない」

どんな理屈だよ、と思っても黙っておく。

美咲は圭の机に寄り掛かり、

「……傷の具合は大丈夫なの？」

「セシルさんに治療して貰ったし、病院にも行ったから心配すんな」

「別に心配なんてしてないわよ」

プイと顔を背ける仕草は少しだけ可愛らしい。

あまり挑発的なことを言わなくなったし、美咲なりに責任を感じているんだろう。

予鈴が鳴り、美咲と交替するようにクリスが席に着く。

ふと優花と目が合う。

だが、優花は顔を真っ赤にして俯いてしまった。

小便漏らしてんじゃねーの？ 発言が悪かったようだ。

「……委員長と何を話していたんじゃ？」

「ケガの調子はどうよ、って今更な話だよ」

「ふ、フラグが立ちまくりじゃ！」

「立ってねーだろ。優花なんて目も合わせてくれねーし」

「皆さん、おはようございます　明日から楽しい楽しい夏休みです  
すね」

投げやり気味なハイテンションで西郷先生が教室に飛び込んできた。

「こら、石動君！ 先生の話を聞きなさい！」

「はい、申し訳ありません」

圭は立ち上がり、西郷先生に深々と頭を下げた。

これが西郷先生との約束……真面目に授業を受けて、自分が悪くないと思っけていても注意されたら謝ること……である。

この取引は西郷先生にとってメリットがあつたらしい。

具体的には不良である石動圭を従わせられると言ふことで教師としての指導力を高く評価され、生徒からも一目置かれるようになった。

申し訳ないと思っけているらしく放課後は図書館で勉強を教えられたり、休みの日には手料理を作つてくれたりする。

「分かれば宜しい」

「むう、むう」

圭は不満そうに唇を尖らせるクリスから顔を背けた。

フラグが、フラグが、と熱に浮かされたように呟いているが今更だ。

こいつは馬鹿みたいに鈍感なのだ。

「ああ、でも、ハードル高いよな」

鬼よりも強い兄貴……セシルさんを思い出し、圭は頭を抱えた。

## 最終章 『回帰』（後書き）

『鬼、来たれ！』を最後まで読んで頂き、誠にありがとうございました。

最初に触れましたが、こちら某社に送り、落選した作品です。

もう5回も、6回も二次選考落選を繰り返して、

一時は「俺はダメだ！ 仕事も、小説も、何一つできないダメ人間だ！」

などと鬱になっていましたが……お陰で気付いたこともあります。

馬鹿でも、ダメでも、私はお話考えることが好きなのです。

では、繰り返しになってしまいますが、

拙作を読んで頂き、本当にありがとうございます！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4130ba/>

---

鬼、来たれ！

2012年1月11日23時50分発行